真・恋姫†無双～無限の剣製をもつもの～

吉田佳樹

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
真・恋姫†無双～無限の剣製をもつもの～

【Ｎコード】
Ｎ３１６１Ｐ

【作者名】
吉田佳樹

【あらすじ】
朝から遅刻と叫びながら家を出て、学校で悪友たちとつるんでいろいろしたり、そんな日常は突如終わりを告げた・・・。
いつもどおりの朝を向かえ、学校へ行く途中・・・。
この小説は、真・恋姫†無双の２次元創作です。初心者で、いろいろお見苦しいところもあると思いますが、よろしくお願いします。

準チート、原作崩壊、オリ主、アンチ劉備&蜀ですので、蜀が好きな方や、オリ主、などがあまり好きではない方は、ブラウザで戻るをお願いします。※感想やアドバイスはいつでもお待ちしていますが、作品や、作者個人に対する批判や中傷などはやめてください。お願いします。

プロローグ

「やばい、やばい、遅刻遅刻！」遅刻と叫びながら自転車で爆走しているのは、何を隠そう、俺中山佳樹（なかやまけいじゅ）です。近所のおばちゃんたちは「あらあらいつもの」的な感じで微笑ましく笑っているが、当の本人は、大ピンチなわけであります。

「おっかしいな、今日はちゃんと目覚ましセットしたのに・・・。」そう、私もバカではない。何度も遅刻しそうになったら、早起きしようとはするはず。それが・・・。

数分前・・・。

「不幸だーーーーーーーーー！！！！！！」とある○○の主人公張りの叫び声を上げる高校生がいた・・・。それは、俺だった・・・。

現在・・・。

結論から言うと、目覚ましは、ペットの猫に床に落とされ、寝つきが神がかっている俺は、気づくはずもなく、長年の習慣どおり、遅刻寸前に起きる。というサイクルになっている。毎晩毎晩、目覚ましを違うところにおくのだが、決まって猫に落とされる日々、そして、こんな日が明日からも続くと思っていた・・・。だがそれは、かなわぬ思いだった。

学校までの最後の下り坂・・・。

「よし、後はこの一本道を・・・おわっと、え？」ペダルを踏み外したのだろうか・・・、詳しいことは分からない、だが私はすごい勢いで坂を下っていき、そこで意識が途絶えて、気づくとそこは

「は？」

・・・・・見知らぬ土地だった・・・・・

プロローグ（後書き）

こんにちは、吉田佳樹です。初めましての方は初めまして、これで３作目です。

どれも完結できてませんが・・・。いろいろといたらないところもあると思いますが精一杯がんばりたいと思うので、よろしくお願いします。

意見＆感想、随時募集中です。

覇王との出会いって何で女の子？（前書き）

エラーで書き直しなう・・・。

はぁ～不幸だ・・・。というわけで、ちょっとカットします。

覇王との出会いって何で女の子？

俺は、中山佳樹、今俺は、中国にいるらしい

「えっと、中国は中国だけど、いったいいつの時代だ？」

見慣れない荒野に一人たたずみ、あたりを見渡す

（そこの人）

頭に声が直接！？

「誰だ！」

（そんなに警戒しないで、私は、この世界の神よ、ごめんなさい、貴方をこっちの世界に飛ばしたのは私よ、ごめんなさい、私の都合に貴方を巻き込んでしまって）

「神様？、えっと、その自称神様がなぜ俺を選んだんだ？」

（それは、貴方にはこの世界を救う素質があるから）

素質？

「素質なんか俺にはない、俺は、ごく普通の高校生だ」

（いいえ、貴方にはすごい力がある、だから、その力でこの世界の子達を救ってあげて、それに、貴方一人じゃないわ、イレギュラーはもう一人、そして、勝手に巻き込んでしまったお詫びに貴方の記

憶にある一番新しい特殊能力を上げるわ）

「特殊能力？」

そんな漫画やアニメのような都合のいいもの

（そう、特殊能力、この世界で生き残るための能力よ、えっと、貴方の場合は、ｆａｔｅのアーチャーの能力ですね）

「無限の剣製！？」そうか、昨日寝る前に見てたから

まさか、俺がそんなご大層なものを

（ええ、使えるわ、だけど気をつけて、使いすぎたら貴方の体は、とてつもないダメージを受けるわ）

「ダメージ？」

（そう、だから極力は普通に過ごして、まあ、無理な場合が多いかもしれないから、無理はしないようにね。それから、ごめんね・・・。）

この言葉を最後に、神様の言葉は聞こえなくなった

まったくわけが分からない。この世界を救え？そんなことできるわけないだろう

そのとき

「おい、そこの兄ちゃん、金目のものを出せ」

山賊？でも山じゃないから山賊じゃない？
神様は無限の剣製が使えるとかいってたけど、そんな馬鹿な話があるわけがない
「えっと、お金は、これだけしか」
俺はなけなしのお金を財布から出して相手に渡す
「なんだ？この紙切れ、こんなもの使えるわけないだろう！」
「ひぃ」
ちょっとこれはマジでヤバイ、剣の切っ先が喉に当たってます。ちょっと切れてますよ！
もうここで終わりかとそう思ったとき
「やれやれ、最近の男共は、弱いものいじめしかできんのか？」
颯爽と槍を持ったちょっとセクシーなお姉さんが目にも留まらぬ速さで賊を倒していく
ちょうど倒し終わったころ、遅れて二人がやってきた
「もう、星ちゃん、速いです」
「そうです、もう少し我々のことも考えていただけなければ」

二人とも息を切らしている様子だ

「すまん、すまん、風、こちらの御仁が賊に襲われていてな、ちょっと助けたところだ」

あ、何はともあれ、お礼を言わなきゃ

「えっと、星さん、さっきはどうもありがとうございました」

深くお辞儀をすると、目の前に待っていたのはさっきのやりの切っ先だった

「え、えっと、何で！？」

「貴様、私の真名を呼んだな」

助けてくれた人は殺気をびりびり出している、他の二人も抱き合って震えている

「えっと、いけないことをしたのなら謝ります。でも、その前にこの土地の風習を教えてくださいませんか？俺は、今日ここに着たばかりでこの土地はおろかこの国についても詳しくは分からないので」

初めは俺を訝しげ見ていたが、やがて、あきらめたようにハァとため息とつくと

「どうやらお主が言っていることは本当のことらしいな、突然のことで申し訳なかった、この国では、普通の名前と成人してから親に授かる真名というものがある。そして、その真名は信頼した人にしか預けてはならんのだ、しかも、男性が女性を真名で呼ぶのは、そ

の、結婚する間柄が呼ぶときのような・・・」

途中から恥ずかしくなったのか最後はごにょごにょ言っていて聞こえなかったが、俺は大変なことをしてしまったようだ

「本当に申し訳ありません、知っていなかったからといって、そんな間違いを」

もう一度俺は深々とお辞儀をした、それはもう土下座をしそうなくらいに・・・。

「そのことはもうよい、改めて自己紹介といこう、私は、趙雲、字は子龍、そして、こっちが」

そういって隣の小さい子を指して

「程イク、です。ほら、稟ちゃん」

そして、隣のめがねの子に

「戯志才です。偽名で申し訳ありません」

警戒されてるな。それから、すこし世間話というかもっぱら俺の質問攻めを答えてもらってから分かれた。三人の話ではこの近くの陳留の太子曹操を頼ってみてはどうだろうといわれた。

「いきなり会って大丈夫かな？いきなり首切られたりしないかな」

そんな不安もあるが結局そこにとよってみるしかなくて、とぼとぼ歩いていると目の前から馬の足音が聞こえてきた。それも、かなり

の数だ。

「よし、もう同じ間違いはしない、今度はちょっと紳士的に行こう、あ、あーあー」

ボイスチェックもオッケー

ちょうどそのとき一団が到着した

俺の目の前に来ると馬を止め、一番先頭の髪がくるくるの金髪の女の子が馬から下りてきた

「あなたは？」

「俺は、姓を中山、名を佳樹、字はありません。そして、真名は、佳樹が真名に当たると思われます。」

あくまで紳士的に・・・。

「なんですって。初対面で、いきなり、真名を許したというの？」

しまった、間違えたかな？もっと慎重に行かないと

「なんと」

「なんと」

隣にいる、二人の将も驚いていた

「はい、そうです。あなたは、魏を背負って立つお方」

「ちょっと待ちなさい、今なんて？」「魏と」
あれ？まさか、まだ魏ではないと・・・。
「何で、その名を、これは私がまだ、春蘭、秋蘭にも話していないことだというのに」
「お下がりください華琳様、妖術の類かもしれません。貴様！よくも」
いきなり、切りかかられた。まぁ、理由は分かるけど・・・。畜生、ミスッたー
「ちょっと、今日はよく切りかかられるな」俺はやけくそで「どうにでもなれ！投影開始！」
これが初の投影だった。なんとか、成功したらしく
なんとか、夏侯惇の大剣を二つの剣で受け止めることができた。
「なに！？」
「人にいきなり切りかかるなんて、しつけがなっちゃいないよ、」
俺は、一気に間合いをつめて、夏侯惇の首筋に剣を突きつけた。
「ぐぅぅ。」
隙を突いたから、勝てたけど・・・、なんてことしてんだー俺はー
「剣をおろしなさい！佳樹、あなたは五胡の妖術使いなの？」「い

いえ」「じゃぁ、なに？」

「信じてもらえるか分かりませんが、気がついたらこの国にいました。そして、ここは、俺の、世界からはるか昔の時代だったのです。」まぁ、武将が全員男性だったことは伏せた。

「このようなやつのことを信じてはなりません。」

まぁ、それがごもっともな意見だよね

「私は、このものが欲しいわ、もう一度言うは、私は姓を曹、名を操、字を孟徳、そして、真名を華琳」

「か、華琳様！」

二人は驚いたように声をそろえる

「二人も、真名を預けなさい。それから、佳樹、その堅苦しい話し方をやめなさい、本当のあなたは違う話し方なのでしょう？」

「私は、春蘭だ」

「私は秋蘭だ、これからよろしくたのむ」

しぶしぶ、二人は、真名を預けた

「さすがは、魏の曹操か、見破られたとは」

とっくにバレてたのか

「私を誰だと思っているの？」

「それもそうだな」

「それよりもさっきのはなに？いきなり剣を出したみたいだけど、」

「ああ、俺の能力は、一度でも見た武具を投影できる能力なんだ」

「とうえい？」

「ああそうか、この時代にはまだそんな言葉ないのか、えっとだな、本物そっくりの偽者を作ることができるんだよ。」

「なら、ためしに春蘭の牙狼を作ってみなさい」

「投影開始！」ガシャン「ほい、できたぞ！」やべぇ、なれてないからめっちゃ疲れる・・・。

「強度もまぁまあね、」「そりゃ、実戦で使えなきゃ意味ないしな」

「詳しいことは、城に行ってから聞かせてもらうわ、春蘭、秋蘭帰るわよ。

これが、俺と、華琳の出会いだった。

覇王との出会いって何で女の子？（後書き）

エラーはいやですね、おかげで一話にはいる予定のものが、二話に分けてあります。というわけで、もう半分は今日中に更新したいと思います。

ご意見&ご感想、随時募集中です。

追記、２０１１、８月１４日修正

この世界は、どうして、こんなに猪が多いのか・・・。（前書き）

予定通り更新したいと思います。

この世界は、どうして、こんなに猪が多いのか・・・。

「はぁ・・・。」俺は今自室のベッドで横になって天井を眺めている。

「知らない天井だ・・・。」暇だ・・・。めっちゃくちゃ暇です。自称神様がいうには、一応武器を扱える程度の筋力、持久力などの基本的な体力はあるようにしたらしい、だから、賊程度に遅れをとることはなくなったわけだが・・・、

～数時間前～

春「佳樹ー！勝負だー！」といきなりドアを突き破りやってきたのは、言わずもがな春蘭である。

「あ、あの～、ドアを壊さないでいただけますか？」

春「ドア？ああ、これか」と壊した残骸を指差した。

春「それより、勝負だー！」

「ええー、ダルイ」

華「これは、いったいどういうこと・・・。」溜息をつきながら聞いてきた。あんた分かってんでしょうが・・・。

春「これは、こやつが」といいながら指差されたのはもちろん俺

「俺かよ！」

華「言い訳はよしなさい春蘭」

春「か、華琳さま～」旬と落ち込む春蘭。

「えっと、春蘭がいきなり部屋に入ってきて、というより突っ込んできて、勝負しろー！って叫んできたんだよ。」あれれ？華琳さん？なんだかいやな笑みをうかべてるんですけど？

華「それは面白そうね、いいわ、今日のお昼ごろ、城の庭で仕合をしましょう。」

というわけで、ここからはとんとん拍子に話が決まり、春蘭との仕合が決まった。

～現在～

まだ、午前１０時ぐらいではないだろうか

「仕方ない、どれくらいの力が出せるか確認するか。」

「投影開始」そういって、昨日出した双剣をだした。

「封龍剣・真絶一門か」俺は出したばかりの剣を眺めながら呟いた。

そのとき

？「それかしら、昨日春蘭の剣を防いだ剣は」

「ああ・・・、って華琳！？」

華「へぇ～見事な剣ね、これはなんて剣なの？」

「ああ、これは、俺のいた世界の本に出てきた剣だよ、大昔に劉を封印した2対の剣、封龍剣・真絶一門」

華「なんともまがまがしい見た目の剣ね、それと、もうすぐ時間だから」時間を知らせに来てくれたのか

「ああ、ありがとうな」そういうと、俺は庭に向かって歩き出した。

～庭～

春「覚悟はいいか！」

「できてるけど、これってほんとに仕合なんだよな？」

春「？そうだが？」

「じゃあ、何で実践の武器を持ってるんですか！？」

春「少しうるさいぞ、いいから武器を持て！」

「はあ、投影開始！」俺は、真絶一門を出した。

春「いくぞ！」そういうと、一気に間合いをつめて、ただ力任せに

剣を振ってきた。

「くぅ」なんとか防ぐが、やはり魏で一位二位を争う武将だ、防戦一方に持っていかれる。

「なんとか、なんとかしなければ・・・。」考えろ、牙狼に勝てる武器を・・・。

「これか！投影開始！」

春「な、なに！？」ガキン！

「俺の国に伝わる伝説の剣、雷を切ったとされる刀、その名も、雷切！」刀身は雷を切った後のように電気をまとっている。

春蘭は今だかつて見たこともない武器に驚いている。

「隙あり！」俺はこの隙に、一気に間合いをつめ、みねで篭手を打ち、剣を落とさせ、春蘭の首筋に剣を突きつけた。

華「そこまで！」

春「なかなか、やるようだな、悔しいが今は私の負けだ。」こういうところはしっかりしてんだよね春蘭って。

「いや、こっちは意表ついただけだし。実力ならそっちが上だよ」効して俺たちは確かにお互いの力を認め合った。

華「驚いたは、春蘭に勝つなんて。今日は面白いものも見れたし、もういいわ、休んでかまわないわよ」

「ありがとよ、さすがに疲れた。」はぁ、今頃家族はどうしてるかね、俺はなんとか生き延びてるよ。

そう重いながら俺は目を閉じた。

この世界は、どうして、こんなに猪が多いのか・・・。（後書き）

自分的には春蘭って、武に関しては真面目だと思うのでこういう終わり方にしました。

ご意見&ご感想、随時募集中！

初陣！～戦って残酷なのな・・・～（前書き）

オリジナルです。

初陣！～戦って残酷なのな・・・・～

昨日の疲れを引きずったままうたた寝をしてたらいきなり華琳に呼び出された。

～玉座～

華「佳樹、陳留の近くの村で賊が出たそうよ、あなたの指揮能力なども見たいわ、だから、兵を５００ほど預けるから行ってきて頂戴。」へ・・・？イマナントオッシャイマシタ？

「ちょっと待てよいくらなんでもそりゃ無理だよ、俺なんて、せいぜい自分の命を守るのに精一杯だよ。」

華「あら、そうかしら、私から見たあなたは、そんなちっぽけな男じゃないのだけれど。」

「買いかぶりすぎだよ、でも、まぁ、分かった。何日かかるかわからんぞ」

華「別にいいわよ」

ｓｉｄｅ華琳

「これで、佳樹の実力が分かる。ふふふ、さて、どう動いてくれるのでしょう。」

ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

というわけで、村にやってきたわけだ、賊は１０００程度、この世界では程度らしい。

村人「お兄さん、曹操様の部下の」

「ああ、そうだよ、賊退治にきたんだが、賊はあそこのとりでにいるとみて間違いないか？」

村「はい、そうです。軍が来ると聞いて逃げたようです、でも、いつ来るか分かりません、早く退治してください。」

砦の前方に陣を張った。今回の陣形は「えん月陣」対象が先頭になって攻める陣形だ、大将が討ち取られやすいリスクもあるが、所詮は烏合の衆、士気を上げる意味でもこの陣形がベストではなのだろうか。

兵Ａ「中山様、準備整いました。」

「ああ、わかったよ。」俺はこれから、初めて人を殺す。覚悟はできてるのか？ああ、もちろん！そう自分に言い聞かせて真絶一門を投影する。そして、右手を前に突き出して

「銅鑼を鳴らせ！全軍、陣形を維持しつつ敵本陣に突撃！」

兵達「「おおおおおお！！！！！！！！！！！！」」

結果を言うと楽勝だった、俺が先陣を切ったおかげで兵の士気が上がった、敵は勢いに乗せられあえなく敗走、逃げるものは逃がした、その後村の人たちに喜ばれた。だが、城に帰ってから一人になったとき突然恐怖に襲われた。

「うえ・・。」吐いた。今になって人を殺した感覚が襲ってきた。

「・・・これか人を殺した重み。これに耐えないといけないのか。」

ガサッ

「!?」物音がして後ろを向いた。そこにいたのは華琳だった。

「ずいぶんと早かったのね。」

「ああ、烏合の衆だったからな、でも、なんか、こう、とてつもなく重いんだよ、肩に何かが重くのしかかったような、心に何かがつっかえたようなｒｙ」と溢れ出してくる言葉を押さえられず言ってしまっていた途中、突然口はふさがれた

「!?」華琳が俺の頭を抱えていた

「いいのよ、私の前でなら泣いてもいいのよ」この言葉に俺は堰を切ったように涙が溢れてきた。

「・・・うあああぁぁん」

しばらくして俺は泣き止んだ、「ありがとな華琳、おかげでなんか軽くなったよ」

「別にいいわ、主が家臣を慰めるは当然だもの」

「はは、そうだな」

「急で悪いんだけど、明日も出陣だから、覚えておいてね」

「げッ！それ言いに来たのかよ」

「そうよ、でも、あなたが不安そうな顔をするもんだからつい慰めたくなっちゃたのよ。」

「はは、そりゃ、どうも、とにかくあしたか、わかったよ。じゃあな」

「ええ」

俺達は、賊討伐にそれほど時間がかかったわけじゃないんだが、村の人たちのご好意に甘えていたら、2～3日の予定が、一週間の滞在になってしまった。そりゃ次の賊も出るわな。

「明日も早そうだから、もう寝るか、」なんか、明日はやな予感がするよ、なんか、こう精神的にきそうなかんじだ・・・。

初陣！～戦って残酷なのな・・・～（後書き）

桂花とか、季衣を出す前に一戦しとこうと思い書きました。

人を殺す重みなどを感じる回でした。

二人が出るのは次ですね。

ご意見&ご感想、随時募集中！

毒舌と天心爛漫、まったく異なる二つだが一つは同じ～どちらも、破壊力はすさ

二人登場します、あの技使おうかな～・・・。

毒舌と天心爛漫、まったく異なる二つだが一つは同じ～どちらも、破壊力はすさ

懐かしい夢を見ていた、朝起きて、遅刻と叫びながら学校へ走る、そして、、近所のおばちゃんに笑われる、学校で悪友とつるみ、家ではゲームやアニメなど趣味にいそしむ、こんなにも当たり前だったのに今じゃとても尊く、でも、どこか違うような懐かしい世界の夢だった、このままこの世界に・・・

?「けいじゅーーー!!!」

「へ?」目を覚ました。

春「佳樹!今何時だと思っているもう出陣の時間だぞ!」

「うそ?マジ?何でもっと早く、ってもういいや、もうすぐ行くから待って!」といったところで、もう春蘭はいなかった。せっかちだなまったく・・・。

「あれ、忘れ物かな?ってまだこの用事終わってないじゃんまだじゃん、代わりに俺がやっとくか、遅刻のお詫びもあるし」

「えっと、ここら辺にあったはず、っとあったあった。」

「ねぇ、君」

「・・・。」無視っすか

「華琳から、頼まれたんだけど、帳簿をもってｒｙ」

「ななな、何で、あなたが曹操さまの真名を読んでのよ」

「いや、それは許してもらってるからで、って早くしないと出陣が遅れるよ、はやく」

「何でそれを言わないのよ、はい、」

「ありがと、ってこれ予定の半分もないじゃないじゃん、説明の時間は・・・ないからついてきて、華琳直接説明してくれ。」そういうと、俺となぞの猫耳さんは華琳の下に急いだ。行く途中数多の毒舌に耐えたのはまた別の話。

～ここからは原作どおりなので中略～

「いいわ、桂花あなたの才この曹孟徳のために存分に振るいなさい。」

「御意」

「よかったな」俺がそう声をかけると

「気安く声をかけないで、妊娠するでしょう！」妊娠っておいおい、でも、めんどくさいから

「へいへい、わかったよ」そう一言言ってやったよ。

猫耳軍師を仲間に加え、新たな賊討伐に出陣した。その途中

兵「前方に賊らしき人影を確認、・・・・誰かと戦っているようです！」

「戦っている、って子供じゃん！しかも一人」

華「かなりの腕みたいだけど、一人じゃ歩が悪いわ、佳樹！春蘭、至急援護を」

「了解」「御意」

桂「ちょっと、待ってください華琳様、なぜこのような男を」

華「桂花はまだ知らないようね、佳樹の力を、ここで見てなさい。」

桂花は、しぶしぶ従って華琳の横に戻る。

「春蘭、お前が先頭をつとめろ、敵の数はそんなにいない、だがあの子も時間の問題だろう。俺は後ろから射撃を行いながら指示をする。では解散！」

春「私は、先頭に立って、兵を率いればいいのだな？」

「ああ、そうだよ」今回の陣形は、またまた「えん月陣」今回は、春蘭もいるしこの前よりも楽かも、さて、射撃なら、アーチャーらしく弓ですかね。

「孤軍奮闘している女の子を援護しに行く」春「全軍すすめーーー！！！！」

おおおおおおおおおお！！！！！！！

ｓｉｄｅ？

「これじゃあ、きりがないよ」もう体力が切れてきた。

「ヘッ手こづらせやがって、今だ、囲んでやっちまえ！」

ああ、僕死ぬのかな・・・・「・・・・・・ぉぉぉぉぉぉぉぉ！！！！！」ドドドドド

馬の駆け音と同時に、誰かが助けに来てくれた。

ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

「春蘭は、そのまま突っ込んで女の子の救助を、残りの兵は前から横広がって、後ろは俺を中心に集まってＶ字をとれ。」

「投影開始」今作るべき弓は、モンハンに出てきた、「龍弓・国崩」

「いっけえええええ！！！」俺は弓の弦を思いっきり引っ張り矢を上空にむけて力いっぱい放った。

上空に飛んだ矢は、曲線を描いて、春蘭と女の子を囲んでいた賊を的確に射抜いていった。

ほどなくして、賊は逃げていった。

春「まてー！！」

「って、ちょっと待て、今すぐ殺した意味がない。」

春「何だとー！」

「もっと意味がある使い方があるじゃないか、偵察を放って、根城を見つける。」

春「むう、それも一理あるな、誰かー」

「いや、もう俺が何人か行かせたよ」

ｓｉｄｅ華琳

華「始まったようね」私はうれしそうにいった。桂花は横でぶつぶつ文句を言っている。

さて、今回はどんな戦いを見せてくれるのかしら。

ｓｉｄｅ桂花

「ふん、なによ、華琳さまから、ちやほやされたくらいで、」

「始まったようね」

「な、何よあの陣形。」あんな陣形見たことない、対象を先頭に突破するですって？頭おかしいんじゃない？

それから、しばらくして、春蘭が例の女の子の近くに来たとき、陣形に動きがあった。

「なんなのよ」今度は、自分を中心に右翼と左翼を広げたですって？あいつは一体何者？って今度はいきなり弓を出した？

それから私は目を疑ったわ。だってそうでしょう？何もない空中に矢を放って、遠くの敵に、しかも、春蘭と女の子以外にすべて命中させるなんて・・・。本当に何者なのよ

side out

しばらくして、偵察も帰ってきて敵の根城が分かった。

「華琳、今から、先にココを潰したらどうだ？」

華「そうね、それより、さっきの動きは何？初めの陣形なんて見たこともないわよ？」

桂「そうよ、大将を前にするなんて、バカなんじゃない？」おいおい、その言葉俺の国の武将に言ってみろよ、速攻殺されるぞ・・・。

「あれはな、大将を先頭にして兵の士気を上げるのを目的にした陣だ、大将の活躍はそれだけで士気に直結する。それに今回の部隊は小規模だったからな、この陣形が使いやすかった。」

華「初めの陣は分かったわ。じゃあ、二つ目の陣は？」

「あれは、最初と逆の陣だ、将を今回の場合俺を中心に、右翼、左翼共に横に広がってV字になるようにするんだ。そうすると、敵が

将を狙って突っ込んでくる、突っ込んできたら、開いた両翼が退路を塞ぐ。これで、包囲、殲滅ができる。」

華「すばらしい陣形じゃない」

「でも、弱点があるんだよ、これは、両翼が包囲する前に中軍が持ちこたえられなかったらそれで終わりだ。」と、そんな話をしていたとき、さっきの女の子が

「もしかして、国の軍隊？」

華「そうだけど」

ガキン！

春「くぅ！」いきなり武器で殴ってきたよ、てか、三国時代にハンマーってあったんだ。って素直に感動してる場合じゃないか。

ｓｉｄｅ華琳

私は、二人が打ち合っているから、二人を止めるために号令を発しようとした

華「二人とも、武器をおｒｙ」

「・・・やめろ。」ひどく冷たい声だった。

春「え？」？「はぇ？」ガキン！

二人を止めたのは、佳樹だった。

ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

「・・・やめろ。」俺は二人の間に割って入った。このとき用いた武器は、モンハンのランス。「ランパート」もちろん、盾がハンマーに対してで、やりは剣に対してだよ？逆だったら折れるし

「まずそこの君、」「へ？僕？」

「そう、事情は知らないけど、まずはお礼を言わないと、命の恩人に対して切りかかるのはよろしくないぞ？」

「それと、春蘭、」「ん、なんだ？」

「よく耐えたな」「なんだ？私をバカにしてるのか？」いや、ほめてんだけど・・・。

それからは、原作どおり進んでいくと思ったのだが、許緒こと季衣が仲間になった後、敵の根城にて、思わぬ伏兵に会った。

桂「か、華琳さま！」

ｓｉｄｅ華琳

私はさすがに死を覚悟した。甘かった。伏兵の可能性を考えてなかった。たかが、賊と侮っていたのだ。そして、矢がこちらに飛んできて・・・怖い・・・たすけてっ！

私は目を閉じたがいっこうに終わりはやってこない。恐る恐る目を

開けてみるとそこには右肩を打ち抜かれた佳樹の姿があった・・・・。

これを好機と思ったのか、賊は根城から一気に打って出てきた。

だが、私は目の前の現象を理解できなくて、取り乱していた。

華「けいじゅ！？大丈夫？ねぇ、」

「ああ、大丈夫さ、このくらい」そういって彼は微笑んだ、とてもいたいはずなのに、やさしく微笑んだ。「少し下がっててもらっていいかな」

華「うん、」そういうと彼は一人で歩いていった。

ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

俺は華琳をかばった。おかげで右腕はうまく扱えない。よって双剣による戦闘は不可能と判断。

戦法を切り替える。

「使いたくなかったんだけどな・・・・。」

ーーーー体は剣で出来ている・・・。

ーーーーーー血潮は鉄で、体は硝子。

ーーーーーーー幾たびの戦場を越えて不敗。

ーーーーーただの一度も敗走はなく。

ーーーーーただの一度も理解されない。

ーーーーーーーー彼のものは常に独り　剣の丘で勝利に酔う。

ーーーーー故に、生涯に意味はなく。

ーーーーーーーーその体は、きっと剣で出来ている。

直後、辺り一体が、赤い荒野になった・・・・。

「ごらんのとおり、貴様達が挑むのは無限の剣、剣戟の極地、恐れずしてかかって来い！」

毒舌と天心爛漫、まったく異なる二つだが一つは同じ～どちらも、破壊力はすさ

ついに使っちゃいました。

次の話は、無双状態かな？（笑）

ご意見&ご感想、随時募集中！

2万PV達成記念スペシャル（前書き）

早くも2万PVありがとうございます。

もしかしたらもっとうまい人たちにしたら当然？（笑）

2万PV達成記念スペシャル

「祝、2万PV達成」

華「ドンドン、パフパフって何させてんのよ」

「どうどう、怒らないおこらない」

華「ふん、で、今回はどうしたの？」

「どうしたって、題名のとおり、「皆さん、今回はまことにありがとうございました。作者自身こんなに早く達成した経験がなくうれしい限りです。だから、これからより一層この作品をよくして、皆さんに喜んでもらえるよう努力します。」だって？」

華「ふ～ん、作者はとても、喜びのようね、でも、私は早く続きが見たいわ。」

「だってよ、作者さん」

2万PV達成記念スペシャル（後書き）

今回は、2万PV達成をお知らせというより、お礼を申し上げたくて投稿させていただきました。

私が書いている作品で歴代ナンバー1の速さで達成したので驚きです。

そして、この作品を本当に楽しみにしている方たちがおられることを改めて認識することができました。

本編の続きは鋭利製作中・・・。

儚い剣～それはただ一人のために～（前書き）

遅れて申し訳ありませんでした。

では、どうぞ。

儚い剣～それはただ一人のために～

ｓｉｄｅ華琳

「なに・・これ」私は目を疑った。確かに私たちはさっきまで砂漠のようなところで戦っていたはず。それが今はどうだろう、目の前にあるのは、ただ儚げで、ひどくいびつな空間だ、そして何よりも、その場には、あたり一面無数の剣で覆い尽くされていた。

「ごらんのとおり貴様たちが挑むのは無限の剣、剣戟の極地、恐れずしてかかって来い！」

え？まさか、戦う気なの？やめなさい、あなたの右腕はもう・・・

ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

さて、誰でもわかるが利き腕を失うと、まともに扱える武器がほとんどなくなるということだ。

「・・・残るは体術と剣技だけか・・・。」俺は静かに思った。いくら俺の世界でゲームだったとしても、すべてがそれと同じわけがない。浅はかだった、伏兵の一人や二人この世界では普通のことじゃないか。それなのに俺は華琳に進軍を薦めてしまった。

「失態だな・・・。」だが今出来ることはただひとつ、この身を盾にしてでも華琳を守らなければ！

「投影開始！」片手で扱える剣術、それは西洋の決闘ではなかろうか？こう思うのは俺だけ？

おおおおおおおおおおおおおお

「敵が大群できちゃったよ・・・。」俺は自嘲気味に笑うと「桂花、「なによ」今から俺が時間を稼ぐ、その隙に華琳を後退させて体勢を立て直してくれ「あなた！そんな体でｒｙ」いいから、頼んだよ桂花」俺はそれだけ言うと大群の前に立ち、

「ごらんのとおり貴様たちが挑むのは無限の剣、剣戟の極地、恐れずしてかかって来い！」そう叫んだ。

「ふっ！はっ！」俺は巧みにレイピアでつきながら一人ひとり確実に倒していった。

賊の首領「な、なにやってんだ、敵は一人、全員でかかれ！」たぶん伏兵を支持したやつだろう

「許さんぞお前！」俺はそいつをにらみ、死刑を宣告したよ、だが、たかが賊とは言えども１０００人ほどが束になってこられてはさすがにつらい、じりじりと、追い詰められていった。それから３００人ほど殺したとき、そのときすでに俺の体はあちこち傷つき、右腕はだらんとぶら下がっているような感じだった。

「さすがにこちらに歩が悪いか・・・。やむ終えん」俺は静かに傷ついた右手を上げた

するとその場にあった剣たちが手の上に集まっていった、

「・・・・停止」

賊首領「な、何をする気だ?気でも狂ったか?」確かにそう思われてもおかしくはないだろう、戦の最中に手を上げるなど・・・。

「・・・停止、解除!」そういうと、止まっていた空中の剣が一斉に敵に向けて掃射された。

それからは簡単だった、生き残ったやつを片っ端から殺すだけだった。だが、俺の体力も限界で、７００人中さっきの技も合わせて５００人殺すので精一杯だった。俺の動きが鈍ったのをみると、賊たちは体勢を立て直すために根城に撤退した。

「はあはあはあ、なんとか、生きてるみたいだ」初めてだ、ここまでの命の取り合いをしたのは。

それから俺は、華琳の陣へと一人で撤退した。撤退した直後、陣に入ったその刹那、俺は力尽き倒れてしまった・・・。

それから、華琳たちは、今度こそ原作どおり、賊を撃退した。だがその戦場に

中山佳樹の姿はなかった・・・。

儚い剣～それはただ一人のために～（後書き）

どうでしたしょうか、自分の頭をフルに回転させて書きました。

気になる点などがありましたら、遠慮せずに言ってください。

あと、タイトルに深い意味はありません。何か合いそうなものがなかったので・・・。

ご意見＆感想、随時募集中！

夢～それは、本当のことなのだろうか～（前書き）

遅れて申し訳ありません。昨日は、疲れで更新はおろか、ＰＣすら開くことが出来ませんでした。

夢～それは、本当のことなのだろうか～

「よっ」といつもの挨拶から始まり、いつもどおりの日々をすごす。

学校に行き、時にはバイトをし、休日は友達と騒ぐ。

「ただいま」俺は普通に挨拶をした。

「おかえり」と家族の返事が返ってくる。当たり前の光景、当たり前のやり取り、なのになぜか違和感を覚える。

母「佳樹どうしたの、今日先生から、学校前で転んだって電話があったわよ」

「ああ、大丈夫、俺は丈夫だけがとりえだし」

母「ならいいんだけど」

それから、風呂に入り、夕飯を食べ、ネットをして、ゲームしてねた。

その日の夢はやけに懐かしかった。

一人の女の子がずっと自分が寝ている布団のそばで泣いている。

その女の子は知っているようだけど、この世界じゃないような、そんな儚く悲しい夢だった。

不意にその女の子が「・・・早く起きなさいよ、バカ・・・。」と

聞こえるか聞こえないような弱々しい声で呟いた。それから、自分の顔を叩いて気合を入れなおして、「何をくよくよしているの、私は曹孟徳よ？」と自分に活を入れた。俺は必死に女の子に呼びかけた、そして、手が女の子の肩に届きそうになったとき・・・・

「夢？なのか・・・？」目覚めたのだった。そしてなぜか俺は、泣いていた。

それからに日々は何にも身が入らず、毎晩あの夢を見た。そして、

「遅刻、遅刻」どこかで見た光景のようだった。そして、近所のおばちゃんたちに微笑まれ、

そう、俺はもうすぐこける。学校までの一本道の坂で、

そして俺は予想通りこけた。だけど・・・

先生「おいおい、またこけたのか？」・・・・違うんだ。

先生「おい、大丈夫か？」

「・・・違う」

先生「なに言ってんだ？」

「これは違う！」そう俺が叫ぶとあたりが一瞬で真っ暗な空間に変わり・・・。

「はっ」と起き上がると、俺の上で華琳が寝ていた。

ｓｉｄｅ華琳

私をかばってから、佳樹は一度も目を覚まさない。息はあるから死んではいないがいっこうに意識が戻らない。

「早く起きなさいよ・・・バカ」私は無意識にそう呟いた。それから私は気合を入れなおし、午前は政務、午後はお茶や、武芸の稽古そして夜は・・・佳樹の看病

そして、いつもどおり看病していると、ウトウトしてきて寝てしまった。

そして目が覚めると目の前には・・・・・・

起き上がった佳樹がいた。

ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

目が覚めた華琳に一言

「ただいま華琳、遅くなってごめんな、それと、ありがとう」

そういうと

「今はいろいろ言いたいけど、おかえり、佳樹！」泣きそうな目で、答えてくれたよ。

夢～それは、本当のことなのだろうか～（後書き）

なんか、グダグだですいません。構想はあるんですが、それを表現する文才が足りません。精進します。

ご意見&ご感想、随時募集中！

出会い～覇王と大徳～前編（前書き）

黄巾討伐の途中に、蜀陣営と出会い、共闘させます。

今回はそれの前編。桃花は出ません。出るのは後編です。

出会い～覇王と大徳～前編

目覚めてから数日、リハビリもしながらみんなとそれなりにのんびりした日をすごした。そんな最中。

「将軍。」

「ん？どうした？」兵士の一人が俺に声をかけてきた。そう、俺が眠っている間に華琳が春蘭や秋蘭と同じように将軍の地位をくれたらしい。らしいっていうのは、俺自身寝ていて詳しいことを知らないからだ。みんなからは、

～回想～

春「おお、お前もついに将軍職か」と喜ばれ

秋「うむ、これで私の仕事も少し減るか」とにこやかに言われ

季「お兄ちゃん将軍になったの？すごいね」と目をきらきらさせて祝ってくれた。（ちなみにこのとこ祝いといって食べた団子は俺の財布から出て行った。）

桂「あんたが将軍なんて、この軍はそんなに人手不足ではないはずだけど・・・／／／」とツンツンな言葉をもらったよ。

みんなから一応祝いの言葉をもらってちょっと恥ずかしかった。

と回想していると

「将軍？聞いてますか？」

「ああ、すまん。で？なんだっけ？」

「えっと、黄巾がまた現れたそうで、今から緊急会議だそうです」

「わかった、ありがとな」

「こちらこそ」

それから急いで玉座に向かうと

華「遅いわ」

「ごめん。」いきなり誤る羽目になった。

「で、どれほどの規模の軍なの？」

桂「およそ１００００よ」

「う～ん、少しやりづらそうだな、だからといって引くような相手でもないし」

春「馬鹿者、我らがこのような賊相手に遅れをとるわけｒｙ」

「はいはい、わかった、わかった」

春「最後まで話を聞かんか！」

秋「姉者の話しは最後まで聞かずとも分かる」

春「しゅ、秋蘭～」

華「で、佳樹、あなたはこういう時どうするべきだと思う？」

「う～ん、近くの義勇軍と手を組むかな」

華「義勇軍とね」

「な、なんですか？」

華「いいえ？あなたからそんな案が出るなんて」そんなからかうような目で見ないでください。

「だ、だめかな」

華「いいえ、今回はこれで行きましょう、ちょうど諸侯で私と肩を並べる者を探そうと思っていたの」

その後、桂花が主に引っ張り今回の作戦が決定された。俺は、一応１０００人ばかりの小隊を受け持った。華琳も桂花も俺の実力が分からないから今回は好きにしてよいとのことだ。出発は、次の日の朝。

今は午後、まだ時間がある。俺は残りの時間、投影の練習に当てることにした。

「投影開始！」ガランと武器を出しては地面に落とす。一刻以後辺りには様々な武器の山が出来ていた。その中には、何の変哲もない

普通のものから、伝説上の武器まで様々だ。とそのとき

ガサ

「はっ！」俺は勢いよくその場にあった槍を音の方向に投げた。

「きゃっ」へっ？なにやら可愛らしい声が

「佳樹！」

「は、はい！」

「今私に向かって槍を投げたのね？」なんと、そこにいたのは華琳だった。

「えっと、物音がしたのでつい」

「ついで済まされると思う？ちょっとお仕置きが必要そうね、そこに直りなさい！」

「お、お手柔らかに」この後二刻ほど説教を受け続けた。その最後に

「また無理するつもり？」

「え？」

「だから、今度の戦でまた無理をするつもりなの？」と一人の女の子のように言われた。だから俺は、

「いや、分からない、だけどいえることは、華琳や、春蘭、秋蘭、

桂花や季衣が大変になったときは、迷わず無理をするよ。」

「そう、でも、必ず無事で帰ってきてね、約束よ。・・・／／／／」こんなにしおらしく言われると

「わかった、必ず、華琳の下に帰って来るよ。約束する。」としかいえなかった。そういうと不意に

「んぐ」何かに俺の唇がふさがれた。

「プハ、こ、これは約束の証よ、これに誓って帰ってくるのよ、絶対・・・・／／／」いきなりキスされるとは思っていなかったからあっけに取られていたがやがて正気を取り戻して、華琳の手をとり、跪くと

「このキスに誓って、あなたの下に必ず帰ってきます。」そういって手の甲に短いキスをした。

次の日、俺たちは出陣した。そして、これが華琳達の運命を左右するものとの出会いになる戦とは、まだ、誰も知らなかった・・・・。

出会い～覇王と大徳～前編（後書き）

どうだったでしょうか、基本的には、二日に一回ペースで書けたらいいなと思っています。でも、守れる保証はないので、皆さんは気長に待っていただけると幸いです。

ご意見&ご感想、随時募集中！

出会い～覇王と大徳～中編（前書き）

遅れて申し訳ありません。

いろいろな方の感想を読ませていただいて、まだまだ自分が至らないなと感じました。

こんな私ですが、これからもよろしくお願いします。

それと、ｐｓｐ版の恋姫の蜀をやっていたら、相変わらずのゆる～い雰囲気にいらいらしたので、予定を変更して、一刀を蜀に入れます。

出会い～覇王と大徳～中編

俺達は黄巾が現れたという場所に来ていた。

「うわっ、ひどい有様だな・・・。」おそらくここには村があったはずだ、だが今は、罪もない農民の変わり果てた姿が当たり一面に広がっていた。それは、まさに地獄絵図のようだった。

「一足遅かった・・・。」と華琳が怒りを抑えながら呟いた。

「ここから何処にいったんだ？そう遠くにはいけないはずだけど」そういいながら、俺は辺りを見渡した。俺はそのとき目を疑った。なぜなら、まだ小さな女の子が、傷ついた母親を守りながら黄巾と戦っているのだ。そして、それは儚げでどこか美しい舞のような戦いだった。

そのとき疲れからきたのだろうか、フラっとしたその隙に、黄巾の一人が切りかかろうとした。

「危ない！」俺は自然とそう叫んでその少女の下に走っていた。

女の子「せぇぇえいい！！！！」私は手に持ったヨーヨーを振り回した。

私の武器は広範囲に攻撃できるが味方を巻き込みやすい。だから私は母を守るために十分な力を発揮できずにいた。

女の子「母様大丈夫ですか」私は気遣うように声をかけた。

母「はぁ、はぁ、大丈夫よ・・・。それより、私を・・・置いて・・・早く、逃げ・・なさい」と母は今にも力尽きそうな弱々しい声で私に言った。

女の子「だめです。そんなこと出来ません。母様は私の、たった一人の、家族なんですよ！」私は、無意識に感情的になりそう叫んでいた。

私は、母様を庇うように両手を横に広げて、目の前の黄巾に向かって叫ぼうとしたそのとき、フラッと体が揺らいだ。

「え？」私、ここで死ぬんでしょうか、いやだ、母様も守れず死ぬなんて！、死にたくない！、助けて！私は目を閉じた。

痛みは一瞬のはずだがいっこうに終わりが来ない。私は恐る恐る目を開くとそこにはとても雄大で、すべてを受け止めてくれそうだと私は思った。

そこで私は意識を失った。

俺は走った。儚げな少女を守るため、その母を守るため、今にも黄巾がその少女に切りかかろうとした。

「やめろぉぉおお！！！！」俺はがむしゃらに投影を行い適当な槍

を黄巾たちに投げた。がむしゃらな一撃は当たり前にように外れた。だが俺がその場に到着するには十分だった。

「許さない・・・。」聞こえるか聞こえないか分からないような小さな声で呟き、投影した槍を地面から抜いて、目を閉じ天を仰いだ。その時間は1秒にも満たなかっただろう。しかしその時間はとても長く俺には感じた。俺は槍を握る手に力をこめた。それはこの村で死んでいった人たちの無念を晴らすためにそう気持ちを込め。

「いっけぇえ!!!」叫びながら無我夢中で振り回した。気がついたら、さっきの女の子が気を失っていた。そして、その母親は、もう力尽きていた。

「どうしたの？その子」遅れてきた華琳はこの光景をものともせず俺が抱えている女の子を指差し聞いてきた。

「ここで、一人で戦っていた。母を守るために。」悔しさを込めるように唇をかみ締めながら言った。その唇からは血がにじんでいた。

「ごめんな、俺がもうちょっと早くきていれば、お前の母も助かったかもしれないのに」涙をこらえながら、奥歯をギリギリとかみ締めながらその少女に対して謝罪を言った。奇しくもそのとき少女は、とても安らかな顔をしていた。とても疲れていたのだろう、この笑顔を守れただけでも、よかったと俺は心から思った。

村での一件から3日が過ぎた。あの少女の名は典イ、真名は流琉、目が覚めてから、事の顛末を語ると、悔しそうに唇をかんでいた。その姿に思わず抱きしめてしまった。典イは俺の胸の中でいつまでもないていた。そんなこんなもあって敵の本拠地をつかんだ俺達だ

が、思っていたよりの兵が多い。
それに、心なしか士気も高まっているようだった。いつもの黄巾とは違い、できる人が指揮を担当していると俺はにらんだ。
そして、俺達はここで義勇軍のひとつである劉備軍と出会う。
華「あなたが劉備？」いつもどおりのはずなんだけど、なんかちょっと怒っている、なんかそんな印象を受けるトゲトゲした言い方だった。
劉「はい、そうですけど」なんと説明すればいいかわからないほど大きな胸の前で手を組んで、答えるその姿は、いささか英雄の風格のかけらもない。しかも、華琳の雰囲気に推されてない？
「よかったのか？」俺は今回の件は納得がいかなかったので聞いた。
「いいのよ、あの、劉備ってやつ、なかなかのやつだと思うわ、関羽に張飛、趙雲などの豪傑、諸葛亮、鳳統のいい軍師、この短期間に、ましてや義勇軍でここまでの者をそろえる者はなかなかいないわ。」とうれしそうに微笑みながらいった。その横顔は、覇王としてではなく、ただ純粋に好敵手（ライバル）に出会えたことを喜んでいるようだった。
そして、次の日に打って出ることが両軍の軍師から伝達を受けた。
ちなみにあの村での一件からどうしてか流琉に懐かれてしまって、朝起きると気持ちよさそうに俺の布団で寝ている。そして、今日も、「またか、」そういいながら俺は流琉の髪をなでていると、いつものように、誰かが来て、そして、華琳が呼ばれ、説教を受ける。こ

れが最近の朝の始まりです。
どんな説教かって？それはご想像におまかせします。それに、この寝顔のためならこれぐらいどうってことない。

出会い～覇王と大徳～中編（後書き）

予定変更で3部構成にします。次回は戦闘です。

流琉を原作より早めに登場させました。作者の勝手な解釈とオリジナルの設定があります。それではまた次回ノシ

ご感想&ご意見、随時募集中！（中傷、文句、批判などは、やめてください）

出会い～覇王と大徳～後編（前書き）

更新遅れて申し訳ありません。

それでは、はじめます。

出会い～覇王と大徳～後編

今俺達は敵本拠地への奇襲を仕掛けるべく待機している。

一応説明しておくが、敵本拠地は、城を岩場が囲む形になっている。だからこそ、奇襲作戦が実行できるわけだ。奇襲部隊は俺の隊と趙雲さんの部隊だ。合計２０００人ぐらいの小隊だ。

俺はあらかじめ軍師達に４段作戦を言っておいたんだ。

一段目、第一陣が敵本拠地へ打って出る。そして敵と接触後、小競り合いを演じたのち撤退。（このとき隊を二つに分ける）

二段目、少しできるからといって所詮賊、たぶん撤退した第一陣を見ると追撃してくるだろう。第一陣の一部は撤退しながら敵を俺達第二陣、三陣がいる岩場に誘導。

三段目、俺達率いる第二陣、三陣は一気に坂を駆け下りて、挟撃する。

四段目、分かれてとどまっていた第一陣は敵の背後から追撃、撤退していた第一陣は、本体と合流後回転し敵に突撃。

とまあこんな感じの作戦だ。珍しく桂花も賛成してくれて、詳しいところを軍師達が手直しいて、この作戦で行くことになった。

「絶景かな、絶景かな」そんな言葉なかったっけ？と思いながら呟く。その言葉通り、坂之上から見る自軍と敵軍の陣はきれいな感じだった。

向こう側にいる趙雲さんたちの部隊もやる気十分という感じだった。

そして、戦闘開始の銅鑼が鳴らされた。

第一陣

華琳軍、大将秋蘭、副将流琉、兵合計２５００

劉備軍、大将関羽、副将なし、兵合計、１５００

第二陣、大将佳樹、副将なし、兵合計、１０００

第三陣、大将趙雲、副将なし、兵合計、１０００

第四陣（本隊）

華琳軍、総大将華琳、大将春蘭、軍師桂花、副将季衣、兵合計、２０００

劉備軍、総大将劉備、大将張飛、軍師諸葛亮、鳳統、兵合計、１５０００

第一陣～第四陣、兵総数（両軍合計）、４１０００

作戦立案、中山佳樹。

「夏侯淵隊、撃ってでよ！」下を見ると、秋蘭が打って出るようだ。

まあ、囮なんだけどね。

「関羽隊、夏侯淵隊に続け！」関羽さんも後に続いたみたいだ。

「うまくやってくれよ。」俺はそう言って、自分の隊にいった。

「これよりわが隊は、趙雲隊と共に敵軍の挟撃作戦に入る。坂は急だがしっかり馬を操ればなんともない。それよりも今から言う陣形では、横からの一撃に対応できなくなる。端二列はよろいを側面に集中させろ！そして、夏侯淵隊が戻ってここを過ぎたら、一気に打って出る！みんな、準備はいいか！」

兵達は一斉に持っている武器を天に突き上げた。その姿はまさにやる気十分といった感じだ。

敵ｓｉｄｅ

「なに？敵が打って出てきただと？フン、この地形で打って出るとは、敵の指揮官はよほどのバカと見える。」敵指揮官波才は不適な笑みを浮かべながら言った。

「全軍！迎撃の態勢をとって待機だ」このときの判断が、驕りが、この戦闘を大きく左右するということは、波才はまだ知らなかった。

秋蘭ｓｉｄｅ

「敵軍が出てきたぞ、全軍、少し競り合えばいい、夏侯淵隊は、撤

退を、関羽隊は途中で別行動を」

まさか、あの男が、こんな大胆な作戦を思いつくとは。私は、無意識に笑っていた。

それから何度か小競り合いを演じた後

「全軍撤退！、撤退！」私が大げさに叫んだ。

これからは、お前の仕事だぞ、佳樹。

ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

敵ｓｉｄｅ

「なに？敵が撤退？フン、全軍追撃しろ！」

おおおおおおお

「これで終わるな、官軍などやはり恐るるに足らんな。」

ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

「来た！」すべてがうまくいっている、秋蘭の隊も負傷者は少ないみたいだ。これはいける。

一人ニヤつきながら

「第二陣、長蛇の陣形を保ったまま一気に坂を下る！全軍進めー！！！」

おおおおおおおおおおおお！！！！！！

そして俺達は、一気に坂を下った。さながら一ノ谷の源義経だ。なんて思いながら坂を下っていった。

乱戦の最中、俺は秋蘭に会った。

「秋蘭、もうすぐで本陣だがんばってな！」と激励した。

「おお、佳樹か、うむ、あと少しでわが対の任務は完遂される、それまでは気を抜けんな」と厳しい表情で言った。さすが、秋蘭、最後まで手を抜かないな、やはり、春蘭に任せなくてよかったと心から思った。

その頃関羽達は敵の背後に追いつくために馬を走らせていた。

「あの、佳樹とかいう男、朱理や雛理と同等とまでは行かないが同じくらいの頭脳を持っていると見える。何セ、あの二人を納得させたのだからな。」私は、考えにふけっていると、隣から、

「あの、どうかされました？」と兵に心配されてしまった。

「いや、なんでもない、それよりも、もうすぐ敵の背後が見えるはずだ。夏侯淵殿も、うまくやってくれるだろう、ぜんぐんっきを引き締めるように」

「ハッ！」そういうと、兵はまた隊列に戻った。
そうだ、私も今はこの戦に集中せねば。そう言い聞かせ、私は馬を走らせた。

「華琳さま！、今戻りました。」
「秋蘭ね、よく戻ったわ、それで今の状況は？」
「ハッ！第二陣と三陣が挟撃し、敵軍は混乱状態、今こそ、作戦通り打って出るべきかと」
「あの男、ここまで読んでたっていうの」と横で桂花が唸っていた。確かに桂花のいうとおり、佳樹の能力には感心されるばかりだ。だが、今はそれを考えるときではない。
「全軍、撃ってでよ！」私の号令で全軍が動き出した。

「ふっ！はっ！」と槍を突き、切り上げ、時にはなぎ払い、槍を軸に敵をけったりして敵を削っていく。そのとき
おおおおおおおおおお！！！！！！！！という掛け声と共に本隊が到着したようだ。このまま押し切れたが少々心もとないと思っていたときだったがこれで勝敗は決まったも同然だ。
「今だ！第二陣、打って出るぞ！」その掛け声とともに俺達の隊は

突撃力をさらに増し、敵軍へ突っ込んだ！

勝敗は明らかだった。

敵軍はちりじりになり、統率もとれなくなっていた。

「私は、何を間違えた、何処で間違えた」目の前の惨劇を見ながら嘆いていた。たぶんそれは私の驕りから始まったのだろう。冷静に状況を見ていれば、気づける部分もいくらかあった。

「あなたが、大将波才ですね」見た目が幼い、瑠璃色のきれいな髪の少女がその姿に似つかわしくないヨーヨーを持ってたっていた。

「すみませんが討ち取らせていただきます」私は目をつぶった。その瞬間声がした。

「やめろ、流琉のような子が殺すのは酷だ、こいつは俺が殺る。」私と同じくらいの男が、短刀を持って、私に近づき、その刀を振り下ろした。ああ、これで終わった。蒼天の天下を見ることができないのか・・・。

この瞬間、黄巾の大将、波才が荒野に散った。

この戦の被害

華琳、劉備連合軍

戦死者、３０００人、戦傷者、５３００人

黄巾軍

戦死者、３００００人（うち一名大将波才）戦傷者、１５０００人

それから、本陣で宴会が開かれた。

俺はなにやら複雑な気持ちで一人静かに飲んでいると、蜀のみんながが声をかけてきた。

「中山よ君はとても優れた武人なのだな。あなたのおかげで、わが軍の被害も大したこともなくすんだ。」と関羽さんが始めに声をかけてきた。

「それほどではないよ、俺の作戦で、現に、敵３００００人、味方３０００人が死んだんだ。俺は人を殺すために、この作戦を考えたんだよ。華琳も、たぶん劉備さんも、考え方は違うにしろ、この国の人たちが笑えるようにしたいと思っているはずなんだ。」

「でもでも、佳樹さんは、こんなにすごい作戦で、黄巾の人たちを簡単にやっつけてくれたじゃないですか～、謙遜しすぎですよ～」と劉備がその無駄にでかそうな胸の前で手を組んでうれしそうにしゃべった。

「ありがとう」ここは素直に礼を言っておこう

「ああ、これでまた一歩民のみんなが平和に暮らせる世に近づいたかな？」と劉備はうれしそうに呟いた。

「おい、ちょっと、聴きたいが、もしや君は、この大陸全部の人を

救いたいとか考えているんじゃないだろうな？」ふと疑問に思ったことを聞いてみると

「なにを言ってるんですか当たり前のことじゃないんですか？」という驚きの解答が帰ってきた。クイズ番組のおバカ解答以上の驚きだ。少なくとも俺は。

「君こそなにを言っている！それは人一人には無理なことだ、いや、人には無理なことだ。それこそ、髪でもならない限り無理な話だ。」俺はあまりにも夢物語なことを言う劉備に腹が立ってつい言ってしまった。そう、ホントについ言ってしまったのだ。

「何でそんなこというんですか？悪い人がいなくなれば世の中は平和になります、そのために、戦って何が悪いんですか」明らかに不機嫌そうに聞いてくる。

「君は言っていることが甘すぎる！悪がいなくなったら平和になる？そんなわけないだろ！いなくなったらまた現れるだけだ、この世界は、表と裏、正義と悪、陽と陰、光と影のように常に反対のものがあるようになっているんだ。だから、悪がいなくなったからって平和にはならない、だから華琳はｒｙ「そこまでよ！」華琳・・・。」いつの間にかそこには魏のみんなも集まっていた。

「ごめん、少し熱くなりすぎた。だけど、これだけはいえるよ、劉備さん、君の考えは矛盾していて甘すぎる。君が無茶言ってる裏で必ず誰かが無理を強いられている。それだけは考えて欲しい」我ながらむちゃくちゃな発言だが、いいたいことはいえた気がした。

その後、徐々に徐々にだが、宴会が再開され始めた。俺はさっき雰囲気をぶち壊したことが申し訳なくてここから立ち去ろうとしたと

き、一人空を見上げている諸葛亮を見つけた。

「ねえねえ、ちょっといいかな？」と気軽に話かけたはずなんだけど・・・

「はわわっ！」と驚かれてしまった。俺はそんなに飛び上がるほど怖かったですか・・・・。少ししょんぼりしてみたり。

「すみません。ちょっと驚いただけで」

「やっぱ驚いたんだ」

「はわわ、どうしましょう」とおろおろする諸葛亮を見て和んでいるけど、用がるのはこんなことじゃなくて、

「ねぇ、君無理してるでしょ」それまでおろおろしていた諸葛亮がいきなり目を見開いて

「え！？何でそんなこと」

「無理はし過ぎるなよ、何セあれが大将じゃ、きついよな、汚いことを一身に背負うのは」俺はそういい残すと宴会場を後にした。

ｓｉｄｅ諸葛亮

あの人は、今私が無理してるといった。汚いことを背負っていると いった。なぜ気づいたのか、なぜ分かったのか、私は、曹操軍で一番危険なのは、佳樹なのだと改めて認識させられた。

出会い～覇王と大徳～後編（後書き）

どうだったでしょうか、これからは年末年始で忙しくなる時期ですが、あと、２話か３話更新できたらいいなと思います。

ご感動&ご意見、随時募集中！（中傷などはやめてください）

アンケート

作者の吉田佳樹です。

この度はいろいろな方の感想を読ませていただき、読者の皆様の意見を聞きたいと思いこのようなことをさせていただきました。

まず、よくある感想が、一刀が呉から蜀になっていることについては、初めは、ある方が書いていたとおり、魏のオリ主と呉の一刀が赤壁で激突させるつもりでしたが、作者個人の趣味で、ある歴史上の人物を呉に転生させて（こちらはまた別の小説として投稿して、呉視点と魏視点に分けようと考えています。）
一刀を蜀に移し、三国で三つ巴の戦いをしようと思っていました。
このことに関しては、何のお知らせもなくいきなり変更したので、皆さんを混乱させてしまいました。申し訳ありません。

そこで、これから三つほど案を出しますので、気に入った番号を感想に書いてください。差し支えなかったら理由もお願いします。

1つ目、当初の予定通り、一刀を呉にして、ここ最近の話から一刀をなくし、つじつまを合わせて、その後は予定通り進める。

2つ目、私が提示したとおり、呉に歴史上の人物を、魏にオリ主、蜀に一刀、の3人がいる、三つ巴の話にする。

3つ目、これは2つめを少し変える感じで、蜀の一刀を少しばかりできる子にして、魏と呉に張り合えるようにする案。

上記３つの案からいい名と思うものを感想に書いて、できれば理由もお願いします。

ちなみに、呉に転生させる予定の歴史上人物は、今話題？の秋山真之さんです。呉の一刀と軍師、参謀と立場も似たような感じになるし、赤壁の水軍戦も面白くなりそうだと思ったので変えようと思ったのですが、感想で戻したほうがいい、という意見が多いので、アンケートさせていただきます。

文章がグダグダになってしまいましたが、アンケートよろしくお願いします。

（期日は一応今日から大晦日までとします。場合によっては長くするかもしれませんが、原則この期間で集計しますのでよろしくお願いします）

アンケート（後書き）

このアンケート期間は終了しました。

皆様ご協力ありがとうございました。

結果については、次回の更新にて発表します。

久々の日常～動き出す影～（前書き）

すいません。新年初めから、いそがしく、更新できませんでした。

アンケート結果を楽しみにしてくれていた皆さん本当にすいません。

それでは、今日から、またしっかり書きはじめたいと思います。

久々の日常～動き出す影～

劉備たちと共闘してから早くも2週間の月日が流れた。

そして、最近は賊も黄巾も現れず、しばしの平和を満喫していた。

街にでると、

「おう、兄ちゃん今日も元気かい？」とシュウマイ屋のおっちゃんが元気に話しかけてきたり、

「あんちゃん、今日も元気そうね」と服屋のおばちゃｒｙもといおねえちゃんがいつもどおｒｙ今日もセクシーに声をかけてきた。え？誰かに脅迫されてないかって？いえいえそんな馬鹿なことが、ソンナガカナコトガ・・・・。と街のみんなにやっとこさ顔を覚えてもらえて、陳留での日々がこれまで以上に楽しくなるだろうと部屋で一人わくわくしていると

「あの、兄さん？」と誰かが入ってきた。声を聞く限り、流琉のようだ。

「ん？なにかな？」とその小柄な少女に微笑みかけると、

「あの～季衣知りませんか？」そう、季衣と流琉はどうやら知り合いらしい。二人の仲はそれはそれは中睦まじく、時にはハンマーとヨーヨーで喧嘩する仲だ。え？そんな喧嘩で大丈夫かって、ええ、大変でしたよ、おかげで庭がぐちゃぐちゃ、おかげで華琳から後で、かなりきついお説教がありましたよ。

どんな説教かって？それは各自ご自由に想像してください。俺はもう思い出したくないです。

「何を一人で考えているのですか？」としたから覗かれてしまった。うわっ見上げられたらくぁいいい／／／照れそうというかすでに照れてる。

「顔が赤いですよ大丈夫ですか？」もうそれ以上覗かなくて大丈夫、てか、これ以上はやめてーーー！！！

「いや、大丈夫大丈夫」でも、平常心を装う、だって紳士ですから。

「そうですか、それより季衣は」それよりですか俺は

「知らないな、でも、きっと、庭でお茶でもしてるんじゃない？春蘭と秋蘭と一緒に」

「そうですか、ありがとうございました」そういうと、タタタと駆けていってしまった。

その後、やることもなかったので寝て過ごし、おきて武芸を磨こうと庭で一人訓練していた。

「今思うと、アーチャーの力って、実際に見た武器しか、投影できないんだよな、何でできたんだろ。」ふと浮かんだ疑問その場で腕を組んでを考える。

「そういえば、あんとき、自称神さんが、エミヤの能力をあげるって言って、その後、ボソッと、まあ、これは、あくまでエミヤの能力がベースなだけなんだけどね、って言ってたな。」なるほど、だから呪文が中途でも発動したり、自分なりにアレンジが聞くんだな、あくまでベースが、エミヤなだけなのか、手言うことはこれは俺の

術になるわけだ。

「っと、もうこんな時間か」気がつくと、もう日が傾きかけて、空が赤く焼けていた。

「戻って夕飯でも食うか」おれは、適当にその場を片付けると、すぐさま食堂に向かって歩いた。

ｓｉｄｅ？

「冥琳、諸国の動きはどうなのかな」俺は、気がついたら、ここにいた。運よく呉の人々に拾ってもらってこうして生きている。

「先日、陳留の曹操が義勇軍と手を組んで、黄巾の波才を倒したそうだ。ところで、北郷、呉にはもうなれたか？」目の前の大人っぽい雰囲気を漂わせる女性が聞いてきた。

「ああ、十分なれたさ、さて、これから二人で、雪蓮の天下実現させて見せよう」そういうと二人は向かい合ってがっちりとお互いの手を握った。

久々の日常～動き出す影～（後書き）

最後のほうの文でもわかるとおり、アンケート結果は1です。

一刀が呉ルートです。前の話も、一応つじつまが合うように調整しました。

それではまた次回

ご意見&ご感想、随時募集中！（中傷、侮辱等は、やめてください）

対決！張三姉妹ＶＳ曹操軍！前編（前書き）

お久しぶりです。そしてすいませんでした。

久々の更新。時期的には、張三姉妹が呂布に惨敗した後です。原作ではがちんこ対決はしてなかったと思うんですけど、今回はガチで戦わせます。

対決！張三姉妹ＶＳ曹操軍！前編

黄巾の波才を倒してからも、俺達は、近くの賊や黄巾の鎮圧などを行ってきた。そしてつい最近、黄巾の首領、張角、張宝、張梁の三人が近くに来ていることが分かった。どうやら、官軍に大敗北を喫し兵力を立て直しながら、こちらに来たようだ、噂では、たった一人に三万の軍が敗れたとか、にわかには信じがたい噂だが、それが、あの呂布によるものらしいのでたぶん事実だろう。この世界の呂布はどれほどのものだろう、たぶん化け物クラスだろうな、俺なんて数合打ち合うのが精一杯。これから、反董卓連合で戦うまでに死なない程度の攻略法を見つけなければ・・・っと話がそれた、この事実が本当なら、こっちも迎え撃たなければいけない、そこで今日の会議で、満場一致で出陣が決定した。

「はあ」

いすに座り頬杖をつきながら溜息をしていると季衣が

「どうしたのお兄ちゃん？」

と聞いてきた。

「いや、また戦争かと思ってね、仕方がないのは分かってるんだよ」

俺は自嘲気味に呟いた

「お兄ちゃんは戦争嫌いなの？」

「ああ、嫌いだね、季衣だって、戦ってるより、おいしいもの食べてるほうが好きだろ？」

「う～ん、確かに戦ってるよりは、おいしいもの食べてるほうが好きだな」

「でも、放っておくわけにもいかないからね」

俺はよいしょっと言いながら立ち上がると

「さて、俺も準備があるから、もう行くな？」

「うん、お兄ちゃん」

そういうと季衣は、パタパタと走っていってしまった。

「相変わらず元気だな季衣は」

そのことに微笑ましく思いながら、こういう純粋な子戦わなくてもいい世を作るために全力を尽くそうと改めて感じた。

それからしばらくしてーーーーー

「みんな出陣の準備はできたのかしら？」

「はい、華琳様！」春蘭は相変わらず華琳一筋だな

「みんな準備ができたみたいだしこれから敵の戦力と作戦会議と行

きましょう。桂花！」

「は！敵戦力は、全部で５万その中には張三姉妹もいる模様です。」

「ありがとう、桂花、さて、五万の大軍にどうやって立ち向かおうかしら」

華琳がうーんと唸りながら皆に意見を求めてきた。

「華琳様、ここはこうがいいと思います。」

「さすがね、桂花」

「華琳様、ここはこうかと、」

「ありがとう秋蘭、見落としていたわ」

などなど、みんなで意見交換がなされ、作戦が決定された。

俺は、今回、車掛の陣を用いて、隠密部隊を率いることになった。

提案したのはもちろんおれ自身だ。

完全な隠密部隊ではないが、トリッキーな動きが得意な部隊の兵士を少しばかり借りて、円陣を３つほど作って後退で攻める戦法華琳に提案した。華琳は、一応許可してくれたが、こちらの命令には従うことを条件にだった。

そして、いよいよ決戦の日が・・・・。

対決！張三姉妹ＶＳ曹操軍！前編（後書き）

遅れて申し訳ありませんでした。

たぶんこれは、後、中篇、後編があると思います。

ご意見&ご感想、随時募集中！（中傷、侮辱等はやめてください）

対決！張三姉妹ＶＳ曹操軍！中編（前書き）

かなりの期間開いてしまいました。

本当に申し訳ございません・・・。

対決！張三姉妹ＶＳ曹操軍！中編

「はぁ、」開始早々盛大な溜息を俺はした。

なぜ溜息かって？それはだな・・・、目の前の状況を見れば分かるよ・・・。

まぁ、マジかで見てるわけじゃないがあの音、あの声援、間違いなく

「ライブだよな・・・。」もう一度俺はハァ、と大きな溜息をした。

だってそうでしょう、戦だと思って覚悟を決めてきたら、１０里ほど離れたところでなにやってるかはしっかりわかるわけでないが、もういちどいう、必ず、絶対、十中八九、ライブをしてます。

敵さんはどうやら、こっちにはまだ気づいてないらしい。

「なあ、華琳、まだ敵さんはこっちに気づいてないみたいだからさ、俺達でちょっとやってきていいか？」傍らにいる少女に声をかけた。

「いいわよ別に、ただしあまり勝手な行動はしないこと、いいわね」傍らの少女はそう念を押すと、出陣の許可をくれた。

「ありがと」素直に俺を言うと自分の部隊の兵の前に立つと、兵を見渡し言った

「今から我々は、車掛の陣を用いて、あの浮かれているやつらのところに攻め入る、車掛は事前に説明したとおり、少人数の円陣をいくつか作って代わる代わる攻めて敵を混乱させる陣だ、今回は円陣

を４つ作った。事前にそれぞれの陣のリーダーを決めたはずだ、第一陣！「はい！」よし、第二陣「は、はい！」あまり緊張するなよ、第三陣！「はい！」よし、そして第四陣は俺が率いる。攻撃順は４、３、２、１といく、いいな？」

「「御意！」」

「では、出陣！」

「「おおおお・・・・・！」」

俺達が出陣した頃、

「秋蘭、佳樹がどう動くか知りたいわ、斥候を放って、佳樹の後をつかせなさい。」

「御意！」

裏でそんなやり取りがなされていたことなど露ほども知らず、俺達はひそかに敵陣に迫っていた。

「いいか、ここからは、時間が勝負だ！気づかれるのは時間の問題、そのときまで以下に敵を混乱させるかだ！」

「御意・・・！」

俺は、いつもどうり、封龍剣を作り出して、

「第四陣！今から作戦行動を開始する！」そういうと、一気に加速して、大軍に向かって突き進んだ。

ーーーーーーーーーーーー

ギャア、グハっ！、

ザシュっ！

なにやらおかしな音が兵の最後部から聞こえ始めた。

「姉さんなんかちょっとおかしいよ」

私は、贔屓目に見ても大きすぎる胸の姉に話した。

「ええ～そうかな？そうはおもわないけど～」と元来天然の姉はのほほんとしている。

そうこうしている間にも、明らかに声援が悲鳴や絶叫になっている。

「な、なによあれ！？」ともう一人の姉も動揺を隠せない。

そんな中から、一人の男が出てきて叫んだ

「我は、曹操軍の中山佳樹なり！張三姉妹の首頂戴いたす！」

私達はそのとき、呂布(あのとき)と戦ったと同じ死という物を感じた。

ーーーーーーーーーー

俺は斬って切って切りまくった。

そして、全軍が混乱して、機能しなくなった頃を見計らって、叫んだ

「我は、曹操軍の中山佳樹なり！張三姉妹の首頂戴いたす！」

そして、伝令に一言「華琳に、敵の背後につくように言ってくれ」

そういうと、一気にその大軍に攻め入った。

「ハ！、フ！ハァ！」掛け声と共に、両手の剣を突き、払い、切り上げる。

そして、「第四陣後退！三陣攻撃！」そういうと、俺は隊を後退させ、変わりに第三陣が前に出た。

このように、絶え間なく攻撃を浴びせ続けた。

4，3，2，1、のサイクルを何回続けただろうか、たぶん5～6回だろう、さすがに敵もたまらず後退した。

拠点から、張三姉妹率いる残党が撤退しようとしたとき、

「今だ！かかれー！」ナイスタイミングだよ！

「春蘭！」俺は、歓喜で目をうるませながらいった。

対決！張三姉妹ＶＳ曹操軍！中編（後書き）

今回はここまで、次回は、張三姉妹を挟み撃ちで撃破するつもりです。

そして、楽しみにしていた皆様、本当に申し訳ありませんでした。

遅れた理由に関しては、模試があった。とか、色々ありますが、一番は、「萌将伝」をやっていたことでしょう・・・。まぁ、おかげでモチベーションがあがりました。だから、これから今まで以上に奮起この小説を書いていきたいと思います。

長々と失礼しました。それではまた次回。

ご意見&ご感想、随時募集中！（中傷、侮辱等はやめてください）

対決！張三姉妹ＶＳ曹操軍！後編（前書き）

遅れました。

ではじめます。

対決！張三姉妹ＶＳ曹操軍！後編

私は華琳様から、敵の背後に回るよう命令を受けた。正直私は、中山佳樹（あの男）のことを信用してなかった。いや、できなかった。だが、あの華琳様が全幅の信頼を寄せる男を今は信じるしかなかった。敵の背後に回ってからどれくらいの時間がたっただろう。
私は怒り口調で「ええい、あいつはまだなのか！」と部下に言った。

「は！予定ではもう少しかと」

「ええい、おそい、おそすぎる、あいつはなにをやｒｙ」あいつは何をやっているといおうとした。だが私は言えなかった。なぜなら前から黄巾の軍勢が撤退してくるからだ。
「まったく、アイツは、本当に凄いやつなのだな。」私は自嘲気味に笑い声高らかに、今にもぶつかりそうな敵に、そしてその後ろから、すべてを包むような感覚さえ覚えるアイツに聞こえるように叫んだ。

「今だ！かかれー！」

ーーーーーーーーー

ナイスタイミングだよ！「春蘭！」俺は目を潤ませながら言った。
良しこれで挟撃作戦が成功した。内心喜んでいた。ここまでうまくいくとは思っていなかったからだ。
後はこのまま一気に押せばいいそう思ったとき、いきなりこっちの隊が押し返された。

「くっ！これが火事場の馬鹿力ってやつか？」皮肉をいって気を紛らわそうとしたが、はっきり言って形成はこっちとって不利だ。いくら春蘭が退路を防いでいてくれているからといって、俺の隊が持たなければ意味がない。

「ちっ！」俺は舌打ちをしていった。

「全軍、不完全でもいい、鶴翼の陣を敷いて、包囲殲滅に移る。車掛の陣をといて今すぐ陣形を変えろ！」

その声に反応し、不完全で不恰好ではあるが、なんとか、鶴翼の陣をしくことができた。

陣形を変えたからといって形勢がすぐに変わるわけではない。

俺は、目の前に、反り返った刀身のサーベルを何本も投影した。それを目の前に突き刺し。

まんまと敵がV字の中央に入ってきたとき「包囲！」と叫び、V字を閉じて包囲殲滅の隊形をとった。

「こっからが本番だ！」激を飛ばし部下とともに、敵を殲滅していった。

「ハ！」敵の攻撃を紙一重で避け、「ぐはっ！」一撃・・・。

「フっ！」「ぐあ！」一撃。

「ハアアァ！」サーベルを右になぎ払い一気に４人を吹き飛ばした。

それからしばらくして「はぁはぁ、ようやく殲滅完了か」一息つき

たいところだったが、目の前からは、まだまだ大群が押し寄せてきた。
「はぁ、もう少し削っておけばよかった」溜息をつきながら、今度は弓を投影し、
「今度は、俺が弓で援護するから、お前達は、各個撃破で、敵を殲滅しろ」そう命令をして
弓を引き絞り、一本、一本確実に敵を狙い撃っていった。
ーーーーーーーーーーーー
私達は全軍の真ん中にいた。
「姉さん、もう投降しようよ」私は、一番上の姉に言った。
「ええ、でも」まだ姉は渋っているようだった。
もう一人の姉はというと
「えぇ、ちぃはもっと歌いたいし目立ちたいし・・・・・etc」
と自分がすばらしいとかなんとかずっと語っている。
ああもうどうしよう、私は一人あわてていた、一時は押し返せたとはいえ、また押し返され、前も後ろも、敵に挟まれた。もし、左右から挟まれたら、それこそ、四面楚歌だ。こうなったら、完全にチェックメイトだ。
ああ～と一人で悩んでいると、
「見つけた！」あの男の声がした。私は、いやな汗が額から頬へと

伝うのを感じた。

ーーーーーーーーーーーーー

「見つけた！」なんとか敵をかき分けて、軍の中央部分に来ていた。これを世間では単騎で突入を言う。後世で無謀にも単騎で突入したとでも、歴史書に書かれるのだろうか？かかれたらそれは見てみたいものだ。

三姉妹のうち一人めがねをかけた少女が、顔面蒼白でこっちを見ていた。一番ちっこいやつは、なにやらブツブツ語っている。一番大きな（色々な部分が）やつは、なにやら状況がつかめてないらしい。

「俺は、曹操軍、中山佳樹だ。抵抗しなければ悪いようにはしない」そういうと、めがねのやつが

「そういいながら殺す気でしょう？」強がっているのか、毅然とした態度だったが、声は若干震えていた。

「本当だ！悪いようにはしない。曹操には俺から説得する。」

ーーーーーーーーーーーーー

中山と名乗る男は、信用しろといった。このままではどのみち私達は死ぬ運命だろう。

どうせ死ぬなら、一か八かこの男に掛けたほうがいいだろう。

「姉さん達。この人を信じて投降しましょう。」

「ええ～やだよー。」と天和姉さんは、反対した。地和姉さんもも

ちろん反論したが。

どうにか私が説得した。

「私達は全軍投降します。」そういい私は頭を下げた。

ーーーーーーーーーーーーーーー

「私達は全軍投降します。」目の前の少女達が頭を下げながら言った。

「ありがとう。投降してくれて。」安堵で表情が柔らかくなる。

「張三姉妹！中山佳樹が捕縛した！」俺はもう一度表情を固くし、力の限り叫んだ！

この瞬間、長きに渡り続いた黄巾の乱は終結した。

対決！張三姉妹ＶＳ曹操軍！後編（後書き）

遅くなって申し訳ありませんでした。

この後は、華琳を説得する話と、もうひとつ日常話を入れて、反董卓連合に入ろうと思います。

ご意見&ご感想、随時募集中！（侮辱、中傷等はやめてください）

黄巾の乱の終息（前書き）

お待たせしました。

今回は短いですが、黄巾の乱の後日談です。どうぞ。

黄巾の乱の終息

今俺達は城で祝杯を挙げている。ようやく、ひとつの戦が終わった。だが、未来から来た俺は知っている。この後、このような戦いはごまんとある。まぁ、何はともあれ、無事生き残ったこと、戦が終わったことを喜ぶべきではないでしょうか？

「なんて、らしくもないな」

「あら、なにがらしくないのかしら？あなたらしい、とてもこっ恥ずかしいことじゃないの」

今はなしたのは、華琳、いずれ、魏を背負ってたつ曹操だ。

「あの～華琳さん？もしかして、俺の考えてることが分かったりは・・・」

「さぁてね」小悪魔的な笑みを浮かべて返してくる。この世界の女性は皆エスパーなのだろか？

以前、流流にも、小腹がすいたから食堂で摘まみ食いでも～なんて考えていたら、すれ違った際

「兄様は、小腹がすいたからって食堂でつまみ食いするようなそんな人じゃないですよね？」と釘を刺されてしまった。そのほかにも・・・って言ったらきりがない。

「はぁ」大きくため息をすると華琳が

「あら、何か悩み事でも？」と聞いてきた

「いや、俺のこれからの脳内プライバシーについて・・・」

「ぷらいばしー？」そうか、この時代にプライバシーなんて言葉はないのか。

「えっと、私事に干渉されないことかな？」と若干疑問系で答える

「そう、では、あなたには気づかれてはまずいことでも？」あの～華琳さん？何でそんなにむくれているのでしょうか？

「いや、だから、そういうわけじゃなくてだな、えっと」必死に言い訳を探すがことごとく返されもはや万策尽きてしまった。ここは素直に

「ごめん」誤るに限る

「ふん」一応許してくれたのかな？

「それはそうと、張三姉妹は、これから、どうするの？」

「ああそれは、あの三人は、というより、あの三人の人をひきつける力は、何かに使えるかなって」

「そう、で、分からないからとにかくつれてきたと」痛いところをついてくる。

「ああ、そうなんだよ、まぁ、急ぎでもないし考えといてくれよ」

「ええ分かったわ、ひとつ聞いてもいいかしら？」珍しく真剣な雰囲気で聞いてくるから

「ああ」としか答えられなかった。

「なぜあの三人を殺さなかったの？殺せば、あなたの名は天下に轟くはずよ？」なんだそんなことか

「そんなことか、俺は、別に名声がほしいわけでもなければ、富がほしいわけでもない。ただ、みんなが笑っていればそれでいいんだ。確かに欲がないといえばうそになるが」チラッと宴会の席で、みんなと酒を交わして笑っている三人を見て

「でも、三人もああやって笑っているならそれだけでいいじゃないか。名声とかそんなのは抜きにしてそれでいいじゃねえか」自分で言って少し気恥ずかしくなり、頬をかいてわざとらしく笑った。

「そう、ならそれでいいわ」華琳は納得したらしく、これ以上の追求はなかった。

ーーーーーーーーーーーーーー

やはり、あの男は、中山佳樹という男は、不思議だ。

私は覇道をいくと決めた。その道とは相反したことをしているあの男はなぜ私の元にいるのだろうか？幾度となくこれを考えた。答えは、出なかった。今日は張三姉妹について尋ねた。どうして殺さなかったかとするとあの男はこういった。

ここのみんなが笑っていれば名声なんてもの入らない、それに、あ

いつらもああして笑っているからいいじゃないかと

ずっと前に、黄巾の波才を倒したときに聞いた。あなたの考えは、劉備のそれと同じではないかと

そしたらあの男はこういった

確かにそう考えたこともあった。だけど、僕は人の黒い部分、人を殺すことの重み、その覚悟をここで教えてもらったから、君のその信念に引かれたから、といっていた。

「はあ」大きなため息を吐いた

「らしくないわね、私は曹猛徳よ」一人活を入れて寝台に横になる。

布団に入り今までの考えのひとつにたどり着く

なぜここまであの男について考えるのか

それは・・・・

あの男がすでに、皆の心に入り込んで、なくてはならない存在になっているからだと。

「やるわねあの男」そう呟くと私は意識を闇に沈めた。

黄巾の乱の終息（後書き）

ちょっと、雑です。すいません。

時間があるときに推敲します。

これからは、受験生ということで、月一回更新なんてことになるかもですけど、がんばって完結目指しますので、応援していてください^^

それでは、次回の更新で。

束の間の日常～乱世の兆し～（前書き）

遅くなりました。

受験勉強って大変ですね＾＾；

でも、小説を息抜きにしてがんばります＾＾

今回かなり短めです。

束の間の日常～乱世の兆し～

「ん」

まぶしい光に目を覚ます。

昨日の宴会はかなり盛り上がって、終わったころには日付が変わっていた。

「う、頭が痛い・・・。」

少々飲みすぎたらしい・・・。これじゃあ親のことも言えないな。

「何が親のことも言えないんですか？兄様」

「うわぁ！」盛大にベッドから転げ落ちた

「いつつ、いきなりどうしたの」

「いえ、華琳さまに起こしてきなさいといわれたので・・・」

げっっとした顔で俺は外を見る。

「わーお」棒読みで言うと

なるほど、華琳が流琉をよこすのも納得がいく。なぜなら外は、もう夕方だったからだ。

「まぶしいー夕日に心が洗われるよー」
「もう、現実逃避しないでください兄様」
「はは、わかってるよ、」
そういいながら、流流の頭をなでる。
「ん、やめてください、恥ずかしいです」
少し照れくさそうに流琉は目を瞑る。
「さて、そろそろ行かないとホントにやばそうだ」
そういって立ち上がると、二人で華琳のいるところに歩いていった。
ーーーーーーーーーーーーーー
おそい、私は今玉座に座って待っている。
「おそい！」
つい声を荒げると
「少々お待ちくださいませ、今、流琉がお起こしに行っておりますので」
と横にいる秋蘭にいさめられてしまった。
「むぅ、佳樹のやつは何をやっているのだ」

隣の、春蘭はイライラしている。

そんなとき

「お待たせ」とその男がやってきた

ーーーーーーーーーー

「お待たせ」と声をかけると

「そんなに待ってないわよ」

とあからさまに不機嫌そうな華琳が待っていた。

「あ、あの、華琳さん？ワタクシメハナニカイタシマシタ？」

最後のほうは華琳から発せられるオーラに圧倒され片言になってしまった。

「いいえ、何もないわよ、朝から待っていても一向に起きてこないで、ほぼ一日中待っていたなんてそんなことは一切ないわよ！」

あったんですね！？そんなことがあったんですね！？

「すいませんでした」すばやく土下座をする。

隣で、桂花が「すごいこの潔さ、この潔さは侮れないわ」とかなんとか呟いている

それから、立ち上がると

「で、みんな集合して、何かあったのか？」

「ええ、あったわ、というより、ありそうよ？かしら」

「袁紹か」

「よくわかったわね、その袁紹が何かやらかそうとしているわ」

「そうか、この日常もやはり長くは続かないか」

「そうね、でも、私たちには成し遂げたいことがある、この後何が言いたいか分かるわよね？」

「ああ、わかるよ」俺は精一杯の笑顔で答えた

「そう」それに対して満足そうに華琳は笑顔で返してくれた。

ーーーーーーーーーーー

その後、会議を終え自室で俺は考えていた。

これから起こることは多分反董卓連合。ということは俺達はあの、飛翔、呂布と戦わなければならない。もしかしたら死ぬかもしれない。

「死ぬかもしれないか・・・。」考えていたことを呟いた。

「まぁ、そう簡単に死ぬ気もないけどな。」

今のうちに、元の世界で読んだ本や、やったゲームを思い出そう。
もしできるならそれを投影しよう、

来るべき決戦の役に立つために・・・！

束の間の日常～乱世の兆し～（後書き）

少し強引ですね＾＾；

もう少しで、董卓編ですね。

その前に2，3話挟みたいなと思っています。

それではまた次回＾＾

反董卓連合結成（前書き）

およそ一週間ぶりの更新！

これから、週一のペースを守れたらと思えます。

反董卓連合結成

黄巾の乱勝利の宴から少し経った日のこと

「中山様、曹操様がお呼びです」

兵士Ａ（仮）が俺を呼びに来た。

「ありがとう、ちょっと聞くけど、今日は何でまた、流琉じゃないわけ？」

本当にどうでもいいことだが、たいてい俺を呼びに来るのは、流琉だ。

「はっ、典韋様は、すでに、曹操様の下におられるのではないかと」

「ああ、そう、わざわざありがとね」

呼びに来てくれた兵士Ａ（仮）を帰して俺は、華琳のところへ向かった。

部屋から玉座のところまではそれほど遠くはない。

「ついたついたと」

玉座の間の門を空けると俺以外の将は全員集合していた。

「えっと、もしかして・・・遅刻？」

「ええ、大遅刻よ」

こめかみをぴくぴくさせながら、華琳がいった

「ごめん、で、今日はなんかあったっけ？」

おれが正しければ今日は何もないはずなんだが・・・。

「ええ、確かに何もなかったわよ、でも、あの、忌々しい・・・」

ゴゴゴオゴgと華琳の後ろから禍々しいオーラが

「あ、あの～華琳さん？いったいどうされたのですか？」

「ええ、あの、麗羽がね、なにやら企てているのよ」

あの袁紹が、また何かをやらかそうとしているようだ。

詳しく聞いてみると、都で董卓の悪評が広まっているという噂だ。

だが、ちょっと前に洛陽を訪れたときには、そんなことはなかった、ということは、十中八九その噂はでっち上げだ。でも、あの袁紹がそんなことをわかるわっけがないので、たぶん、素で、信じているのだろう。はぁ、馬鹿だ・・・。

「で、その、反董卓連合に参加するの？」

「ええ、するわよ、天下に名を知らしめる絶好の機会だもの。」

それもそうだ、こういう機会は願ってもない。

だが、俺が知っている董卓とは違って、この世界の董卓はとても、いい人らしい、少し、気が乗らないが、仕方がない。乱世なのだ。

「で、いつ集まるんだ？」

「あら、察しがいいわね、来週よ」

来週か、だったら、近いうちに、隠密が来るころだろう。

「何を考えているの？」

華琳に聞かれわれに返った。

「ああ、なんでもないこっちのことだ。」

それから、会議は順調に進み、無事今日の会議は終わった。

終わり際に、桂花に

「あのさ」と声をかけたところ

「なに！」とあからさまに嫌悪感をあらわにされた

「いや、ちょっと相談、たぶん、近いうちに、こっちを探りに、江東あたりから、隠密が来ると思うから、警備を増やしてほしいんだ。特に、華琳の部屋の近くに」

「わかったわよ」と一言言うと、走っていってしまった。そんなに男が嫌いですか！

それから、夕食の時間まで、訓練、夕食後、部屋で書物を読んでいると、

ーーー気配がする・・・。

ヒュン！

音と共に、剣の切っ先が飛んできていていた

間一髪投影した剣で軌道をずらし首筋ぎりぎりで受け止めた

「その腕前と、気配の消し方、呉の周泰か甘寧か」

ビクリ！と気配の主が動揺した。

「殺すつもりはないんだろ？だったら姿を見せたらどうだ？」

返事はない・・・ならば！

「あーあんなところに猫がー」←棒読み

・・・・反応なしと・・・。

「甘寧か」

猫に反応しないといったら甘寧以外いない。

「俺も、気配と話すのはさすがに疲れるんだ。どうせ、御使いさんからの差し金かな？」

「よくわかったな」

ようやく気配の主・・・甘寧が出てきた。

「さすが、噂にたがわぬ腕前だ」

「お褒めに預かり光栄だ。でも、何でまた俺に？」

「ああ、あの北郷とかいう男が、お前を監視してこいと、そして、一回刃を交えよと」

なるほど、噂が本当か確かめるためか、もし、一回で死んだらそれはそれまでか・・・。

「なるほどね、大体分かったよ。だったらもう十分監視したんじゃない？今日一日、監視してたでしょ？だからあえて、見張りを、俺からはずしたんだけど、まぁ、さすがに、風呂までは見てなかったみたいだけどな」

「貴様！」

「えっと、甘寧さん？何を怒ってらっしゃいますか？お風呂のくだりは冗談でして」

ガキン！ガキン！

二三合打ち合って一定距離をとる。

「貴様は不気味なやつだな、武器を瞬時に作るのか？」

「ああ、俺の能力は記憶にある武器を瞬時に複製できる能力だ。」

「私にはよくわからんが、周愉様や北郷にはお前は興味深い人材らしい」

「そうかい、それは光栄だ。」

コツコツ

ん？廊下から足音が・・・。

ヤバイ！

「えっと、後で誤るからごめん！」

そういうと俺は、甘寧を抱えてベッドへ走り、抱えたまま布団に入った

「※ふｋｆｊｈｒｖ！・ｋｈｆ？！」

甘寧はわけが分からないことを叫んでいるが俺は必死に口を塞ぎ。

「ちょっとの間我慢して、今人が来てるんだよ、すぐ済むから」

そういうと甘寧は大人しくなった。

ガチャ

「中山、なにやら、剣を打ち合う音が聞こえたぞ」

入ってきたのは、春蘭だった

「ああ、ほら、新しく作った剣を試していたんだ。また二対の剣を作ってみたもんでためしにね、あはは・・・」

「ふぅん、そうか」

そういうと、納得したのか足音は遠ざかっていった。

なんか、いけない本を読んでいるときに、親が部屋に入ってきたときの気持ちだ。

「ぶは」

甘寧が、自分で俺の手を口から離し、息を吸う

「貴様！仕方がないとはいえ、このような恥ずかしいことを・・・・／／／／／」

照れているのか顔を真っ赤にして剣を握って今にも切りかかろうとしている。

「だから悪かったって、でも、今ばれると大変だろ？だから仕方がなかったんだって、って剣をこっち向けないで！」

それからしばらく二人は追いかけあっていた・・・・。

それからどんな経緯があったのか知らないが・・・・、

ピヨピヨ

「ん？朝か・・・・。」

なんだか、体が重いような、ん？動かない、

「ん～・・・。」

一瞬固まったが間違えなく、甘寧が俺のベッドで寝ていて、俺に抱きついている・・・・。

「えええええええ！？」

雲ひとつない日の朝、ある部屋にひとつの叫び声が響いた。

反董卓連合結成（後書き）

作者は、甘寧が好きです。周泰も好きです。

呉の隠密係が好きです。だから、予定どうりフラグ立てさせていただきました。

ですが他の呉のメンバーには立てる気はありません。

それに、二人が仲間になるなんてこともありません。二人は呉のまんまです。

それではまた次回の更新で＾＾

敵さんとの一日、ツンデレって破壊力抜群～♪

絶叫から数分後、甘寧が目覚めるまで、いろいろなことに耐えていた。

何に耐えたかって？それはご想像にお任せします。

それからもいろいろと遭った

起こしに来た流琉に逃げられたり・・・。

夏候姉妹にバレて、しまいには、華琳に報告され、俺の人生終了宣言されそうになった。

幸い、あれが甘寧だとはばれていないらしい。もしばれていたらと考えると、生きた心地がしない。

どうせ、

「あなたは敵軍の女と寝るような下劣な男だったの」

とかいいながら、ご自慢の絶によって、その場で速攻首が飛んでいただろう・・・。

「ああ、よかった」

そう呟いたころようやく

「あれ、ここは・・・？」

話の渦中にいた人が目覚めた。

そして、タなりにいる俺に気づき

「・・・・／／／／」

見る見るうちに顔を赤くして

「貴様ー！！！」

斬りかかってきた

「あぶなっ！」

咄嗟に投影した剣で何とか防ぐ

「貴様、私に何をしたーー！！！」

がしっと肩をつかまれ、ガクンガクンと揺さぶられる。

「な、ナニ～モ、シテイ、マセ～ン」

揺さぶられながら言ったためよくわからないことになってしまった。

「俺だって知らないうちにああなっていたんだよ」

ようやく開放され状況を説明した。

そうか・・・、と甘寧もようやく納得してくれたらしい。

それからしばらくして、二人で街へ行った。

といっても、そのまま行ったら、街の人にばれてしまうので、俺は軽く変装していった。

街へ行ってからはいろいろなところを二人で回った。

そして、夕日が沈み始めたころ

「ありがとう、おかげで私も少し気分転換ができた。」

「いや、いいよ、俺も、楽しかったしさ、でも、いつかは戦場で会うんだな」

「そうだな、」

悲しそうにに俯くと、口を開き

「思春だ」

突然のことに驚きつい

「は？」

と聞き返してしまった

「私の真名だ、受け取れ・・・・／／／／」

「顔、赤いよ」

そういうと、思春は照れながらベタでありきたりなセリフを言った

「夕日が赤いだけだ、じゃあな、〝佳樹“」

そういうと、シュンっと消えてしまった。

文字どうり消えてしまった、気配があたりから完全に消えたから分かるのだ。

「できれば戦いたくないよな、“思春“」

そういうと俺は、一人さみしく、その場を後にした。

俺と思春がいた場所には、ひとつの剣が刺さっていた。それは、甘寧が使っていた剣にそっくりだったらしい。

敵さんとの一日、ツンデレって破壊力抜群〜♪（後書き）

甘寧との、真名交換の話です。短いです。

他の作者さんの作品を読ませていただいて、自分の作品はちょっと展開が速すぎるかなと、だから、これからは日常話（拠点フェイズ）を少しずつ入れていきたいと思います。

こんな軍で大丈夫だろうか？いや大丈夫なはずがない（前書き）

前回の話で、ツンデレではなく、クーデレでは？という指摘があったのですが、確かに、クーデレのほうがしっくりくるかも。

こんな軍で大丈夫だろうか？いや大丈夫なはずがない

思春との別れからしばらく経って、いよいよ反董卓連合の初顔合わせの日になった。

大陸に名を連ねる諸侯の面々が一箇所にずらりと集結した。

「うわ～、絶景かな絶景かな」

一人うわ～といいながら集結した軍隊を眺めていると

「見た目は絶景だけど、ほとんどの軍が、雑兵よ」

我らが華琳様が、フンと鼻を鳴らしながら言った。

まぁ、確かに、こんな軍隊、呂布一人で蹴散らされるだろう、袁紹はそれを分かっているのだろうか？

オオーホッホッホッホ！！！

絶対分かってないだろう・・・。先が不安だ。

それから、袁紹が華琳にちょっかいをかけてきたり、いろいろあったが、程なくして、会議が始まった。

まずはじめに、みんな自己紹介をして、それから本格的な会議がスタートした。

俺が見る限り、警戒すべきは、やはり、袁術の客将の孫策だろうか、まぁ、歴史に名を残す人物で言えば、劉備だろうか？それに気になるのは、孫策のところにいる、北郷一刀という人物だ。天の御使いと言われているらしい、どうも現世から来たらしい。

「それで、総大将は誰にしますの？」

不意に袁紹が切り出した。

「誰か立候補者はいませんの？」

苛立ち気味にいう。

どうせ、自分がなりたいんだろ？

やれやれとあきれていると、

「だったら、麗羽がやればいいじゃないか、みんなもそれでいいよな」

ピンクの髪をした、えっと、ハムの人？

「ハムじゃない、公孫賛だ」

あらまエスパーですか？

はむのゲフンゲフン、公孫賛の提案に、諸侯みんなが賛成して、それからは一応とんとん拍子に進んだ。

結果から言うと、泗水関は劉備と袁術が引き受けることになった。

劉備はなにやらたくらんでいるようだが、いや、あいつにそんな能はない、たぶん二人の軍師だろう。

「ねぇ、アナタが中山佳樹？」

会議のテントから出ようとすると、不意に後ろから、声をかけられた

「いかにも、そういうあなたは？」

言いながら振り返ると、そこにいたのは

「ああ、私は孫策、こっちが周瑜で、こっちが」

右の女性を紹介し、左の男性を紹介しようとしたとき

「俺は、北郷一刀、天の御使いなんてよばれている」

左の男性はそういった。

「こちらこそよろしく」

三人と握手し、

「で、お三方は俺に何用ですか？」

「え、それはねぇ」

孫策がなにやら楽しそうに、ニコニコしながら

「あの、堅物の甘寧を骨抜きにしたのはアナタ～♪？」

「ぶっ！！」

いきなりのことに吹いてしまった。

「あーん、その反応からして、本当なのね」

そういった直後

チリーン

首筋にひんやりした感触が・・・。

「ああ、あの、思春さん？」

真名を呼ぶとさらに、刃が食い込み・・・ってやばいやばい

そんな二人の様子を見て孫策が止めに入ってくれて事なきを得たが、多分あのままだったら死んでいた、絶対。

それから、久しぶりに雑談し、出陣の時間になった。

「投影開始」

「ほいっと」

俺は作ったソレを思春に向かって投げた。

「おまえ、何のつもりだ。というかこれは何だ、」

渡されたソレが何か分からず首をかしげている

可愛い・・・。

「来るべき時に必要になる。ソレは引き金を引けば、使える。むやみに使うな、ここぞというときに使え、ピンチのときに使え、そしたら俺が駆けつけてやる」

ガラにもなくかっこつけてみたら

「そ、そうか・・・／／／」

向こうも照れていてこっちまで真っ赤になった。

「ゴホン、と、とにかく、がんばって来い！」

「ああ」

そんなやり取りをし、俺は、思春を見送った。

こんな軍で大丈夫だろうか？いや大丈夫なはずがない（後書き）

あれー？なにやら呉ルートぽくなってるような・・・・、大丈夫ですよ、多分・・・。大丈夫、もう前みたいに急に変えたりしないから＾＾

泗水関はサボり？いやいやそんな訳には・・・。（前書き）

さて、早々６月、これからも、完結目指してがんばります！

泗水関はサボり？いやいやそんな訳には・・・。

戦いの火蓋が切られた。

今、連合軍は、泗水関を攻略している。

といっても、我らが華琳様は、後続待機。

袁術軍と、劉備軍が、主に攻略している。

袁術軍は主に孫策さんたちが、劉備軍は関羽や張飛などの、豪傑が中心となって攻めている。

だが、やはり、泗水関を守っている、華雄もただの武将ではないわけで、連合軍は、その結束力のなさも相成って、苦戦を強いられている。

そして、劉備軍はなにやら策を講じているのだろうか？あからさまに苦戦している。

たぶん、手に負えない分を後続にぶつけて、自分の軍の被害を小さくしようとしているのだろう。

「あーあ、暇だよな」

戦場を眺めながら場違いな発言をする。

周りでは、伝令が、慌しく行き来している。
その中に、孫策軍苦戦。という言葉が・・・。
まさかな、あの思春が早々に負けるわけは。
「華琳様、ちょっと野暮用ですのでいってきます」
居ても立ってもいられなくなり華琳に直接進言した。
「ええ、いいわ、諸侯にアナタの武を知らしめてきなさい」
いろいろと察してくれたのだろう、何も聞かずに、オッケーしてくれた。
泗水関より少し手前、激戦区に到着すると、袁術軍、特に孫策軍が支援が行き届いておらず苦戦していた。
このままでは、敗走も時間の問題だろう。
そのとき
「はぁあああ！！！」
「ふぁあああ！！！」

ガキン！！！

激戦区のさらに中心のほうから、打ち合っている声が聞こえる。

この声は、思春か！？

ーーーーーーーーーーーーーーーーーー

華雄か、まさかここまでとは

劉備軍は、なにやらおくに押し上げられている。

孫策様は今は手一杯で援軍は望めない。

「ふッ！はぁああ！！！」

「くぅ！」

華雄に押し返されかなり飛ばされた。

「お前もなかなかだが、やはり私にはかなわなかったようだな」

華雄が大斧を担ぎながらこちらにやってくる

もはやここまでか・・・。

（「ピンチのときに使え、そしたら俺が駆けつけてやる」）

そうか

「これでも、くらえぇえええ！！！」

アイツからもらったソレを力いっぱい引いた

パァン！！！

ガキン！！！

「なに！？」

華雄は咄嗟に右に避けたが避けたところに一撃が飛んできた。

私は忘れないだろう

その背中を

「遅くなってすまなかったな、でも、もう大丈夫！俺が、何とかする」

双剣を構えて佇む

中山佳樹のその勇姿を・・・。

泗水関はサボり？いやいやそんな訳には・・・。（後書き）

皆さんお久しぶりです＾＾

久々の更新で、かなり短くてすいません。

う～ん、最近本当に、フラグがあらぬ方向に・・・。

これって魏ルートだよね。うん、大丈夫間違えないから、多分大丈夫・・・。

泗水関陥落！残る敵は・・・（前書き）

二ヶ月間も音沙汰なしで申し訳ありません。

これからは、月に一度は更新できるようにしたいです。

泗水関陥落！残る敵は・・・

「うおおお！！！」

「はあああぁああ！！！」

互いに力いっぱい武器をぶつけ合う

「やるな、さすがは華雄だな」

にやりと笑いながら呟く

「なんだそれは、まるで、戦う前から実力を知っているようだぞ」

俺はにやりと笑い

「そのとおりだよ！」

と双剣を斜めに振り下ろす

「次」

持っていた双剣を横に捨て

「投影、開始！」

目の前に無数の日本刀が出てくる

「これは、千刀、いくらでも替えのきく刀だ、これで舞台は整った。
さぁ、本番と行こうか！」

ーーーーーーーーーーーーー

私は目の前の戦いから目をそらせなかった。

華雄も佳樹も、互いの一撃が、ひとつの舞のように美しいのだ

力が拮抗したとき、不敵な笑みを佳樹が浮かべた

次の瞬間、持っていた剣を横に捨て、何かを呟くと

二人の周りには、無数の剣で埋め尽くされていた

「佳樹、お前はいったい何者なんだ」

ーーーーーーーーーーーーーーーー

「てやぁあああ！！！」

「ふん！！！」

ガキン、ドゴォオン、キン

金属がぶつかる音があたりに広がる

「うおぉおおぉお！！！！！」

「はぁあああぁぁああ！！！！」

俺は、そばにある二本をなげ、近くにある二本を構え華雄に近づく

華雄は、咲に投げた二本の剣を大斧でなぎ払う

その隙に目の前まで接近する

「なに！？」

華雄は大斧で防ごうとするが俺は、左手の剣で上へ押し上げ

「これで、最後だぁあああ！！！！」

右手の剣を首筋へ一気に突き立てた

ガラン

華雄は大斧を落とし

「参りました」

悔しそうにそう呟いた

俺は高らかに叫ぶ

「敵将華雄は曹操が家臣中山佳樹に降伏した。今このときをもって、泗水関は、俺が占拠した！！！！」

残るは、飛将軍、呂布のみ。

ーーーーーーーーーーーーーー

このあとは、意外と、とんとん拍子でことが進む、泗水関のなかにまず華琳が、次に孫策、と順々に入城し、いくらか兵を整えると、次は、虎牢関の前に各軍布陣した。

戦はすぐに始まらず目立った戦闘はなかった。

その夜、華琳に呼ばれ彼女が居る天幕へ行くと

「あ、あああ・・」

中には、なんと寝巻き姿の華琳がいた、時間的に当たり前といえば当たり前だが

「どうしたの、早く入りなさい」

「あ、ああ」

華琳に急かされるがままに天幕に入る。
天幕の入り口が閉まると、
「佳樹、今回の働きは見事ね、思った以上の働きだわ」
「それはそれは、光栄です」
「そこで、褒美をやろうと思うの、何か希望はある？」
褒美か、考えたこともなかった。
「そうだな、うん、このまま、ただ、流されるがままに、華琳と一生を共にすることかな」
「・・・・・／／／／」
そういうと華琳は真っ赤になっていた
「おい、どうし「な、いきなり何言ってるのよ・・・／／／／」へ？」
何言ってって、そりゃ一生一緒にって
「そんな、結婚なんてそんな・・・／／／」
「馬鹿、もういいから早く出て行きなさい・・・／／／」
華琳は枕やら、杯やら、とにかく回りにあるものを手当たり次第に

投げ始めた

「わかった、わかった、俺が悪かったから」

謝りながら、たまらず天幕から出る

「はぁ、明日また謝るか」

天幕に背を向け、自分の天幕へ歩いていった

ーーーーーーーーーーーーーーーー

華琳は悶々としていた。

（「ただ、流されるままに華琳と一生を共にすることかな」）

思い出しながらベッドの上で悶々とする

「何言ってるのよ」

ぶっきらぼうに言っているが心なしか顔はにやけている

「もう、バカ」

一人でそう呟きながら布団に顔を埋める。

今日はいい夢が見れそうである。

泗水関陥落！残る敵は・・・（後書き）

久しぶりの華琳様回

やっぱり、華琳様が一番かな？

これからも、亀更新かもしれませんが、がんばりますので、応援よろしくお願いします。

難攻不落、虎牢関！

俺達連合軍は、今、虎牢関の前方で陣を敷いている。もうすぐ夜明けだ、たぶん夜明けと同時に開戦だろう。

「準備はいいかしら」

華琳が最終確認のためにみんなを集めた

「この戦いは、これからの天下の覇権争いまで発展する重要な戦いだわ。みんな、厳しい戦いかもしれないけどがんばって頂戴」

はい！とみんな元気よく答える

「では、配置を説明するわ、桂花」

桂花をよんで、各将の配置を伝える。

「で、結局俺が呂布と当たると・・・」

正直勝てる気がしない・・・。

「えっと、華琳これはいったいどういう・・・」

「ええ、貴方は私の軍で一番のイレギュラーだから、大丈夫よ、手が空いた子に援護させるから」

そうか、一対一ではないのか、せこいかも知れにが呂布相手に一人

はどうも心もとない、誰か着てくれるなら少しは安心だ。

「わかったよ、最善は尽くす」

夜が明けてきた、いよいよ決戦か・・・。

「じゃ、行ってくるよ」

華琳に向かっていう、すると、いつもどおりの威厳ある態度でいう

「必ず帰ってきなさい」

それにむかって

「ああ、必ず帰ってくる！」

決意を新たに俺は、飛将軍呂布の待つ虎牢関へと向かう！

ーーーーーーーーーーーーーーーーー

俺が行ってまもなく戦いの火蓋は切って落とされた。

三国志至上、初の大規模戦争ではなかろうかと俺は密かに思う。

入り乱れる敵兵を切り伏せかわしながら前へ進む。

「はぁあああ！！！」

「ぐぁ！」

「ぎゃあぁ！」

次々と迫りくる敵を倒しながら進む

「ぐぁあああ！！！」

前方で一気に砂塵が待った、連合の兵士が次々と飛ばされる

関羽や張飛もそこへ向かったようだ

「そこに呂布がいるのか？」

ここまで俺は、投影を使用していない。なぜなら少しでも、魔力を呂布戦に備え温存しておきたいからだ。ゆえに武器は敵兵から奪って戦っている。

「投影開始」

いつもどおりの封龍剣を投影し、砂塵の中心部へ行く。

俺はそこで驚愕の光景を眼にする

そこには、関羽、張飛、超雲、孫策など、各軍の名だたる名将がことごとくやられている。

「次はお前・・・！」

呂布は、紅く光る眼をこちらに向け一言呟いた

その刹那
目の前にはもうすでに呂布の姿が
「遅い・・・！」
一気に檄を振り下ろされる
「くぅ」
双剣をクロスさせ何とか防ぐ
「ん・・・？」
呂布は初手がとめられたことが意外だったのか小首をかしげた
「今度はこっちからだ！」
間をおかず今度はこっちから攻める
「はあああぁああ！！！」
「ふっ！」
ガキン！キン！
ガン！ガキン！ガキン！キン！

「うぉおお！！！」

キン！キン！キン！キン！

双剣を休むことなく振りかざす

だが、呂布はひるむことなく淡々と一撃一撃丁寧に柄で防ぐ

「投影開始！」

俺は双剣をやめ、日本刀を投影した

「？」

いきなり武器が現れ少し驚いたようだ

「雪刀雪月花！」

刀身に白く冷気が見える

「いくぞ！」

「ん！？」

ガキン！

刀身が檄に触れた瞬間、檄が、触れた部分から凍り始めた

「行けるか？」

「無駄・・・！」

呂布は、武器が凍ってもお構いなしに向かってきた。

「畜生、アイツ、叩きながら割るつもりだ」

呂布は凍った部分を優先的に俺に叩きつけ、氷を割ろうとする

「こんなところで終わるかよ！」

「はぁあああ！！！」

ダンっ！っと地面をけり、一気に呂布を切りつける

ガキン！ガキン！キン！ギリリ！！！

数合打ちあい、雪月花はぼろぼろになり、俺自身も体中に切り傷ができた、だが、呂布はいまだ無傷で立っている

「へっ、ここまでやってまだ無傷かよ、華琳には使うなっていわれてたけど、これは使わないとやばいな」

腕を組み、正座をしてその場に座る、眼を閉じ呼称する。

Ｉ ａｍ ｔｈｅ ｂｏｎｅ ｏｆ ｍｙ ｓｗｏｒｄ.

――――――― 体は剣で出来ている。

Ｓｔｅｅｌ ｉｓ ｍｙ ｂｏｄｙ, ａｎｄ ｆｉｒｅ ｉｓ

my blood.
血潮は鉄で　心は硝子。
I have created over a thousand blades.
幾たびの戦場を越えて不敗。
Unknown to Death.
ただの一度も敗走はなく、
Nor known to Life.
ただの一度も理解されない。
Have withstood pain to create many weapons.
彼の者は常に独り　剣の丘で勝利に酔う。
Yet, those hands will never hold anything.
故に、生涯に意味はなく。
So as I pray, unlimited blade works.
その体は、きっと剣で出来ていた。

「・・・？」

呂布は何が起こるかわからず一向に打って出てこない

それはこっちに好都合だった

「運はこっちに味方した！」

あたり一面が一気に荒野へと変わり、周りにはいくつもの剣が突き刺さっている

「さて、ここには無限の武器がある、ちょっと付き合ってもらうぞ飛将軍、呂奉先！」

「・・・こい！」

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

「これは！？」

私は、目の前の状況に絶句した。

「散々使うなといったのに・・・」

佳樹は、また使った。自分の体が耐えられるか分からないのに・・・。

呂布と佳樹がいたであろう場所は今、白く包まれていて中を確認することができない。

関羽や超雲など、先に呂布と戦っていた者たちが中に入ろうとするがすり抜けてしまうらしい。

私は、ここで迷っている場合ではない！佳樹が呂布を別の空間へと連れて行ってくれたおかげで、敵の攻撃力は大幅に減った。

「今が好機よ！全軍打って出なさい！」

おおおおおおおおおおおお！！！！！

私の掛け声で、諸侯も同様の指示を出し、一気に反撃に打って出た

「佳樹、貴方の努力、決して無駄にしないわ・・・！」

難攻不落、虎牢関！（後書き）

主人公は、まだ、無限の剣製に耐えられません。ゆえに、完全に扱えてないので、長時間の戦闘は、できません。一応補足までに書いておきました。

戦闘描写、あまり得意ではありません、ですが、できる限り精一杯書きました。

次も、戦闘が主になってくるので、がんばります。

伝説との一騎打ち！勝ち目がなくても・・・それでも・・・

外がどうなっているか俺には分からない、俺は今、固有結界の中で呂布と対峙している。

「・・・・・」

「・・・・・」

二人とも警戒して、一向に攻めない

ヒューと風が吹く

俺はその場にあった一本の槍を抜く

どうやら、真田幸村が使用した、槍のようだ

「・・・ッ！」

「・・・・ッ！」

お互い同時に地面を蹴り、武器をぶつけ合う

まず俺が、つきをすると、呂布は柄を使ってそれを上へそらす、呂布はすかさず懐に、横なぎを放つ

俺は、柄を下に下げそれを防ぎ、横にそらし、今度は、こちらも横

なぎを放つ

呂布は一歩下がってそれをかわし、突きを繰り出す

俺は右に避けたが、呂布は檄の柄で左腰を打ってきた

流石にかわせず、一メートルほど飛ばされる

「やはり、伝説になるくらいの強さだもんな、はぁ、俺なんかが相手になるわけがないか・・・」

自嘲気味に呟きながら真っ赤な天を仰ぐ

「小競り合いを繰り返しても勝ち目はないっと、じゃぁ、華々しく、一矢報いて終わるか！」

俺が、最後の一撃のために身構えたのを合図に、呂布も最後の一撃をするために、檄を構える

「・・・こい！」

「いくぜ！最終奥義！」

そんなもんないけど・・・。

「いっくぜぇえええ！！！！」

槍を構え、呂布に走っていく。

呂布も檄を構え、走ってくる

二人は近づき、そして互いが交わる

二つの影は交差し離れ、やがて、ひとつの影が倒れた・・・・。

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

私の号令からの反撃で虎牢関は一気に陥落した。

「いや～あんたの軍はすごいわね、たった一人で、呂布を相手にしちゃうやつがいたりとかさ」

孫策は気さくに話しかけてくるが私はそういう気分ではなかった

「どうしたのよ、そんな辛気臭い顔して」

孫策が、ちょっかいをかけてくる

私は軽くあしらい、天幕へと戻る。

この戦で、春蘭が、眼を負傷、張遼との一騎打ち中に、流れ矢が当たって負傷したらしい。

董卓は、死んだらしい、ホントか嘘かは分からないが、大義名文の消えた連合軍にもはやとどまる理由はなかった。

「華琳様」

桂花がそばに来て

「これからどうしましょう」

眼をちらちらとある方向に向けながらきいてきた。

その目線の先には今だ白い空間が広がっている。

中では外の様子が分からないらしく戦いが終わっても壮絶な戦いを繰り広げているようだ

そうねと答えをいおうとしたときに、その結界が解けた。そして見えてきたのは、一つの影が、倒れるところだった。

ーーーーーーーーーーーーーー

俺は呂布と最後の一騎打ちをした

そして、交差したとき一撃ずつ加えあった

そして、

ぐらっと体が傾く、

ああ、そうか、俺は負けたのか、悔しいけど、俺の完敗だな

笑いながら俺はその場に倒れた。

ーーーーーーーーーーーーー

「佳樹！」

私は、そこに呂布がいるのもかまわず走っていった。

「華琳様！」

秋蘭や桂花が叫ぶ声も無視してひたすら佳樹の元へ走った

そして私が佳樹の元へ行ったとき、呂布は檄を構え、私ごと佳樹をきろうとした・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・と思ったら

「ぐぅ～」

気の抜けた音があたりに響く

「おなか減った・・・」

私は気が抜けたが、何とか耐えて

「もう戦は終わったわ、行く当てがないなら今は私ときなさい、ご飯もあげるわ」

そういうと、コクンをうなずき、素直に私の天幕へと歩いていった

味方になった張遼が迎え入れたのを見ると

自分の横で倒れている佳樹を起こし、私の膝の上に寝かせる

「ぷっ、なんて顔してるのよ」

思わず笑ってしまった。なぜなら、殺されるかもしれない戦いで、

彼は、安らかな顔で笑っていたのだから。

伝説との一騎打ち！勝ち目がなくても・・・それでも・・・（後書き）

虎牢関編一応終了です。

このあと、後日談的なものを挟んで次の編に入りたいと思います。

呂布を仲間にするか、しないか、ちょっと迷ってます。

このままじゃだめだ・・・俺は、変わらなければならない

「もう、馬鹿ね」

そばで寝ている佳樹をみる

この男は、あの呂布相手にたった一人で戦いを挑み、結局ボロボロになって帰ってくる

「でも、助かったわ、貴方のおかげで、私たちは勝つことができた」

そっと、彼の髪をなでながら呟く

「でも、いい加減離してくれないかしら、この手を！」

そう、私が見舞いに来て手を握って以来、一向に手を離さず、かれこれ二時間はこのままである

彼の目から涙が零れる

うなされているような、懐かしむようなそんな表情だ

「そうね、貴方は本当はこの世界の住人ではないのよね」

分かりきっていたことを口にする

そう、分かっていた、佳樹がこの世界の住人ではないことは、それは、本人も口にしている

「寂しくて当然よね」
この世界に彼の家族はもちろんいない
そっと、握っていた手が離れた
「じゃあ、いくわね」
私は、佳樹の部屋から出た
ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー
「・・・・っは！」
俺は飛び起きた
「ここは・・・？」
あたりを見渡すが薄暗くてよく見えない
「えっと、俺は」
まず記憶を整理しよう
「呂布と戦って、無限の剣製を使って、それで、負けたのか」
思い出した、最後の一撃を受けてなお彼女は立っていた
「はぁ、やっぱ勝てるわけないよな」

はぁ～とため息をついて、寝台から降りる

そこに

ガチャ

ドアが開き

「あ、おはようございます兄さま」

流琉が入ってきた。手にはぬらした布があった

あらかた俺が起きていないことを前提で物を用意したのだろう

「えっと、おはよう、それで、どのくらい寝てたんだ？俺は」

一番気になっていたことだ

「えっと、恋さんと戦ってから、三日ぐらいですかね」

ふ～ん、三日か、ん？ちょっと待て

「流琉、ちょっともう一回言って」

「三日ぐらいですね」

「ちょっと前」

「戦ってから」

「もうちょい前」

「恋さんと」

「そう、そこだ、恋って呂布の真名？って言うか呂布って今どこに」

立て続けに質問したので流琉が頭を抱えている

「えっと、急がなくていいから、一つずつ」

「えっと、まず恋っていうのは呂布さんの真名です」

ふんふんと頷きながらきく

「そして、今恋さんは、この城内にいますよ、きっと庭かな」

俺が寝てた間に、ずいぶんと事が進んでいるようだな

「ありがとう、もう少しで夕飯の時間だね、うん、久しぶりにみんなと食べたいかな」

それを聞いてぱっと目を輝かせ

「はい、今からみんなに言ってきますね」

そういうと、部屋から駆け出していってしまった

「そんな大事かな」

頭を掻きながら苦笑いを浮かべた

ーーーーーーーーーーーーーー

あれから、数時間たって夕飯の時間

俺が行くとみんな食堂にそろって待っていた

「みんな、お久しぶりです。ご心配おかけしました」

一礼すると

「堅苦しいのはいい、早く食べよう」

春蘭か、相変わらずだ

「姉者もっと、行儀よくだな」

秋蘭もいつもどおりだ

「やっとおきたわね、この変態」

桂花も相変わらず口が汚い

「兄ちゃん、よかったー」

季衣がニコニコ顔で手を振っている

「佳樹さんが起きてくださってよかったです」

凪、ありがとう

「ホンマにこのまま起きんかと思ったわ」

真桜、ひどいな

「そうそう、本当に死んじゃいそうな顔だったの」

沙和も冗談きついな

「みんな相変わらずだな・・・」

みんなの顔を順番に眺めていると、自然と涙が出てくる

「ちょ、ちょっと、何泣いてんのよ」

「いや、ごめん、桂花、なんか、うれしくってさ、俺は一人じゃないんだって」

「そうよ、貴方は一人じゃない」

その声に振り向く

「華琳」

「貴方は確かにこの世界の住人じゃないかもしれない、でも、この城にいるみんなは貴方の家族のようなものよ」

そうか、家族か

「ありがとう・・・みんな」

涙で鼻声になりながらお礼を言う

そんな中

「ほお、アンタが恋と殺りあったちゅう男か」

えっと、誰？

「だれ？見たいな顔せんといてぇな、ウチは張遼、真名は霞、よろしくな」

「ああ、よろしく」

「ちょっと、ええかな」

「ああ、いいよ」

なんだろう

「ウチと模擬戦しいひん？」

模擬戦

「な、なんで」

少し動揺している
「あんたがホンマに強いか知りたいんや」
うわ、眼か本気だ
「わかったよ、やりますよ」
降参と両手を挙げて言う
ーーーーーーーーーーーーーー
しばらくして、模擬戦の準備が整う
「試合、開始！」
秋蘭の合図で始まった
「投影開始！」
まずは様子見で双剣をってあれ？
「ちょっと、タイム！」
一同え？となる
「えっと、剣が出来ない」
どうしてだ？原因は？

そういえば、神様が力を使いすぎるとだめだって・・・まさか！？

「もう力が使えない！？」

一人であわあわしてると

「なに一人でぶつぶついっとるんや」

いくで！と一気に突っ込んできた

武器、武器、

「春蘭、借りるよ！」

近くで、一人だけ武器を持ってきていた春蘭にの大剣を勝手に借りて受け止める

「おい、勝手に使うな！」

わめいているが気にしない、後で誤ろう

「ほお、よく受け止めたな」

「そりゃどうも！」

一気に剣を上に押し上げる

「懐ががら空きだぜ！」

槍が浮いて出来た懐の空きに押し上げた力を利用し、そのまま上からたたききる

「ック！」

槍を垂直にし、柄の部分で防ぐ

お互い後ろへ飛んだ

「・・・・・・・」

「・・・・・・」

静寂があたりを包む

ガラン

「やめたやめた」

霞が止めだといってきた

「なぜだ」

「ホンマの実力ちゅうのは、何回か打ち合えば分かるもんや」

「そうか、で、ご期待とおりだったか？」

「そうやな、期待通りやったけど、次は、佳樹の全力を見たいわ」

「そりゃ、霞もな」

二人で見つめあい

はっはっはっはっは

二人で笑いあった

ーーーーーーーーーーーーーーーーーー

それから意気投合し、二人で、酒を飲みながら月を眺めてから、分かれて寝た

それから自室に行き寝台の上で考える

「やっぱり、能力に頼ってたよな」

改めて考えてみるといつも自分の力というよりは能力にたよっていた

「能力が使えないと、俺って何が出来るんだろう」

そんなことを考えながら自然と意識は闇に沈んでいった

ーーーーーーーーーーーーーー

次の日、俺は一つの答えを出した

「旅に出たい？」

「ああ、俺は、もう能力を使えない、それが一時的なのか、永久なのか分からない今、俺は、自分の力で戦わなければならない」

そうだ、いつまでも頼ってばかりではいけない

「そうね、で、なぜ旅なの？」

「ああ、諸国を訪れ、見聞を広める、そして、文武とも修行するつもりだ」

各地を回って、諸国の武将と戦って武を鍛え、諸国の軍師と話、文を鍛える

「そうね、このままではこっちもまずいわ、いいわ、旅をしてらっしゃい」

「ありがとう、華琳」

「ただし条件があるわ」

条件？

「ええ、貴方はどこか、人を惹きつける、しかも、それは、女に限ってと来ている、だから、監視として、この城の将を一人同行させるわ、選びなさい」

人を惹きつけるって・・・、

「華琳、もしかして、嫉妬？」

チャキン

「今なんていった？」

ひぃ、絶が首筋に・・・

「な、何にもありません」

「そう」

華琳はにこやかな笑顔で絶を引いてくれた

「で、誰を選ぶのかしら？」

うーん、華琳は無理だ、仕事がありすぎる。春蘭？無理だ、毎日事件が続きそう

秋蘭、なんか、厳しそうだな・・・。ってことはいろいろと考えて

「流琉で」

「それはなぜ？」

「それは、いずれこの曹操軍を担う彼女を早いうちから外に触れさせておくメリットがあるから、それと、一番、問題が起きなさそう、この二点だ」

「そう、筋が通ってるわね、流琉、入ってきなさい」

え？入って来い？

「お呼びでしょうか」

流琉が俺の隣で膝をつく

「今の話は聞いていたわね」

「はい」

「じゃ、今すぐ準備しなさい」

「はい」

「華琳」

「何かしら？」

済ました顔しやがって、確信犯だろ

「俺が、旅に出たいということも、同行者を流琉にしたいっていうのも分かってたろ」

「さぁ？どうかしら？」

こいつ・・・流石完璧超人

――――――――――――――――――

あれから、流琉と二人でいろいろと話し合った結果、まずは、西に向かうことにした

それから、準備などをして、あれから、三日の月日がたった

そして、出発の日

「みんな、見送りなんていいのに」

みんな、忙しいっていうのに

「じゃあ、いきましょうか、兄さま」

にこっと流琉が笑いかけてくる

「ああ、行こうか！それじゃ」

「「行ってきます」」

このままじゃだめだ・・・俺は、変わらなければならない（後書き）

主人公のいいところが分からないという意見がありましたので、主人公のいいところを探しにいく、新たな力を手に入れるための旅に出るというお話です

しばらくの間は、このシナリオが続くと思います

出来るだで更新したいですが、遅くなってしまうかもしれません。

ですが、応援お願いします＾＾

出会いは勘違いから？

俺と流琉は西のほうを目指して旅をしている。

呂布との一戦以来能力は安定せず、にさん度打ち合えばすぐ砕けてしまう有様だ。

旅に出るに当たって、初めて武器を購入した。店主がいうにはなかなかの代物らしいのだが・・・。

いかんせん、使ってみなくては分からないのが現実で・・・。

とまぁ、一応順調に旅は進み、もうすぐ、西涼に到着するところだ。

西涼には、馬超と馬岱というそれなりに正史でも、名の知れた武将がいるので、修行にはもってこいだと思ったのだ。

「兄様、このあたりの村で、泊まりませんか？そろそろ夜になりそうですし」

「それもそうだな」

流琉の提案を素直に受けて、このあたりで止まる村を探した

そう時間もかからずに、村を見つけとめてもらえた

「よかったですね、あっさりと見つかって」

「そうだな、ちょっとあっさりしすぎてびっくりだ」

うん、ちょっと事がよく運びすぎな気がする。

いつもなら、金を要求されたり、村の警護でしばらく滞在させられたりと、条件を提示されるはずなんだけど・・・まいっか

それから俺達は、これからの計画を立ててから寝た。

寝たって言ってもうん、いかがわしいことはしてないよ、うん、だってなんかいい雰囲気になるたびに、こう、首筋がひやりとするからさ、だいたい陳留の方角から・・・。

まぁ、これも慣れてきたから、手は出さず、本当の兄妹みたいにしてるけど

横でかわいらしく寝息を立てている流琉の頭を撫ぜながら

「おやすみ」

といった

さて寝よう

それから、あまり時間もかからず眠ることが出来た・・・・・

ーーーーーーーーーーーーー

夜更けごろ、あたりがさあがしくなって目が覚めた。

「兄様！」

「ああ！」

二人で頷きあうと武器を取り表へ出た

そこに広がっていたのは、阿鼻叫喚だった

間違った強者が弱者を殺す

老若男女関係なく、殺しつくしている

「くっそ」

俺は気づけば、武器を片手に賊に向かっていた

「ちくしょぉおお！！！」

その光景が、流琉との出会いと重なって

居ても立ってられなくて

「・・・・兄様」

流琉に肩に触れられて気づく

またやってしまったのかと

「ごめんな・・・」

「いいんです」

「ごめんな・・・」

「もう、無理しなくていいですよ」

俺は、流琉の前でただ泣き崩れることしか出来なかった

その後の話によれば、村の被害も俺の暴走のおかげで、何とかなるレベルに収まったらしく、一応よかったみたいだ。

だが、暴走したおかげで、購入した武器はすべて刃こぼれしたり折れたりして使い物にならなくなってしまった。

仕方がない、賊の隊長が使っていたちょっと高そうな剣を拝借しよう

そして、俺達はすぐに村を出た。村の人たちは別にいいといってくれたんだが、俺自身が申し訳なくてその厚意は気持ちだけ受け取っておくことにした。

村から少しはなれたところで目の前から多数の騎馬隊が押し寄せてきてあっという間に包囲されてしまった

その隊の隊長らしき女の子がこちらに来ていった

「お前は、このあたりの賊の見方か？」

「いやいや、逆にその賊を滅多打ちにした帰りで」
とこれまでの経緯を説明したのだが、一向に聞き入れてもらえない。
副官らしき少女は気づいているみたいだが助ける気ゼロのようだ

「あーもう面倒くせー、怪しいから斬る！」
女の子は挙句の果てに切りかかってきた、というより突きかかってきた？
「くっ！」
咄嗟に剣で防いだが、防いだ衝撃で剣はすぐに砕け散ってしまった
「賊の剣は使えないな」
俺はよけながら流琉に助けを求めようとしたが、すでに流琉も戦っており手助けしてもらへそうにない
そのとき
「余所見をするな！」
女の子が不意を突き文字通りついてきた
「仕方がないか」

俺は、槍の柄を右手で流し、懐にある短剣で一気に相手の首筋に突きたてる

「少しは話を聞いてくれ」

出会いは勘違いから？（後書き）

変な幕引きとまとまりのない文ですいません。

そして短いです。

そろそろ、受験本番に近づいてきて大変ですが、暇があればちょくちょく更新したいと思いますので、応援よろしくお願いします。

追伸

今回の相手は誰でしょうかね？

まあ、分かりやすいでしょうがね＾＾

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3161p/

真・恋姫†無双～無限の剣製をもつもの～

2011年9月27日16時03分発行